

平成三〇年度 修士論文 (提出年月日：二〇一九(平成三一)年二月一三日)

病いを患った語り手による幻想的語りの研究

三重大学大学院教育学研究科

教育科学専攻

人文・社会系教育領域

217M006 倉地 悠

目次

序章

- 第一節 病いを語ること 3
- 第二節 病いと日本文学に関する先行研究 7
- 第三節 研究の目的・方法 9

第一章 梶井基次郎「檸檬」における幻想と病い

- 第一節 「檸檬」について 12
- 第二節 先行研究 13
- 第三節 「檸檬」における幻想と病い 18
- 第四節 「錯覚」・「想像」と病い 21
- 第五節 本章のまとめ 24

第二章 堀辰雄「死の素描」における「僕」が見た「天使」

- 第一節 「死の素描」について 26
- 第二節 「僕」が見る「天使」——「現実の世界」と「幻想の世界」—— 29
- 第三節 「僕」が見る「天使」——臨死体験—— 31
- 第四節 看護師を「天使」と見る「僕」 33
- 第五節 本章のまとめ 35

第三章 伊藤整「病歴」における病いと健康

- 第一節 「病歴」について 37
- 第二節 「私」が語る病歴 40
- 第三節 病いの境界線 43
- 第四節 健康を語る「私」 46
- 第五節 本章のまとめ 52

第四章 吉行淳之介「決闘」に見る病いの実体化のプロセス

- 第一節 「決闘」について 54
- 第二節 一人称「僕」による語りの位置と態度 57
- 第三節 喘息発症のプロセス 61
- 第四節 病いの実体化と言葉 64
- 第五節 本章のまとめ 68

終章 69

《凡例》

資料の引用に際しては、次のような基準に従った。

- 一、書名・雑誌名・新聞名は『』、記事のタイトルは「」で括った。
- 二、旧仮名遣いは原文のままとした。ただし、旧字体の漢字は新字体に改めている。
- 三、明らかに誤植と認められる箇所は、「ママ」とルビを付して原文通り記載した。
- 四、「／」は原文での改行を、「(略)」は中略を示す。
- 五、引用文中の傍線はすべて引用者による。

序章

第一節 病いを語ること

本研究は、日本文学において、テクストにおける病いを患った一人称の語り手が幻想的に物語を語ることの意義を明らかにし、そこから、私たちが生きる社会における病いを取り巻く言説を脱構築する視座を獲得することを目的とした研究である。

病いに侵されることは本来、悲惨な状況として捉えられるものだろう。しかし、文学作品においては、悲惨とは異なる別の意味を表すことがある。

スーザン・ソントグの評論『隠喩としての病い』（一九七八年）¹では、病いにとりついた隠喩、つまり文学における病いの表象について論じられている。例えば、十八世紀末から十九世紀初頭の西洋において、当時まだ死に至る病いであった結核にロマン的なイメージが付与されたことについて、次のように指摘している。

「ロマン的苦悩」という名で知られる、文学的態度と性的態度の混淆したものは、その多くが結核とそれが隠喩的変形をこうむったものに由来する。この病気の初期症状を芸術の様式にのっとって描写する（たとえば、体の衰弱を物憂さに変形する）過程で、苦痛のロマン化が起こり、現実の苦痛の方はもっぱら抑圧されてしまうのであった。結核を病むということに対して、本来それにそぐわないロマンティックなイメージが付与された。そして現実的な病いの実態よりもむしろ、それとは異なるイメージの方が先行してしまっただのである。

柄谷行人は、前記のソントグの研究を日本文学に適用した。柄谷はソントグの指摘を踏まえながら、「結核は現実には病人が多かったからではなく、「文学」によって神話化されたのである。事実としての結核の蔓延とはべつに、蔓延したのは結核による「意味」にはかならなかった」と指摘した。また柄谷は、「第三の新人」にいたるまでの近代文学には、結核と文学の恥ずかしいほどの結合がある。むしろ、恥ずかしいのは、結核という事実ではなく、結核という意味なのだ」と述べ、明治三十一年に書かれた徳富蘆花の「不如帰」がそのはじまりだとしている。「不如帰」について柄谷は、作品の眼目が、ヒロイン・浪子が結核によって美しく病み衰えていくところであり、結核は一種のメタファーになっている、としている。

²ここで柄谷の言う「恥ずかし」さとは、文学において、結核と、それとは本来相関性のないイメージが繰り返し結びつけて描かれてきた結果、文学が「意味」の蔓延に加担してきたことへの批判の意味が含まれているのであろう。

このように、ソングは「結核にとりついた「隠喩」、柄谷は「蔓延したのは結核による「意味」という言葉を用いながら、事実としての病いとそれとは本来相関性のないはずのイメージの結合について指摘している。

では、そもそも事実としての「病い」とは何なのか、ということについて考えておく必要がある。ここで、G・M・フォスター、B・G・アンダーソンによる次の指摘を見てみたい。

我々は病気を、実験室での検査や、臨床検査の他の方法で確認される生物学的実体、つまり病理的状态と見なしているわけである。しかし、文化的視点からは、病いは全く違ったものとなる。病いは、ある人が彼の普段の役割を十分に果たせなくなり、そしてその状態に対して、何かがなされなければならないということに対する、社会的認知なのである。換言すれば、我々は、病理学的概念である疾病 (disease) と、文化的概念である病い (illness) とを区別しなければならぬ。(略) しかし人間の疾病は、生理学的機能不全が個人や社会を脅やかすものと見なされ、病いと定義された時にのみ、社会的に重要となるのである。この区別を指摘する別な言い方をすれば、医師は疾病を治療 (cure disease) しようとするが、彼は病いを治す (treat illness) のである。というのは、我々が助けを求める状態を引き起こすのは、普通は、疾病病原体の存在ではなく、機能の損傷であるからである。／社会は、それぞれの異なった様式で病いを定義し、そしてある社会で病いの証拠として受け入れられる症状も、別の社会では無視されるかもしれない。同一の社会での定義も、また時がたつにつれ変化するかもしれない。

³ このようにフォスターとアンダーソンは、病気を一面的に捉えるのではなく、病理学的概念としての疾病 (disease) と、文化的概念としての病い (illness) とを区別して捉えていることに注目できる。さらに、この指摘に補足する形で、小林昌廣が次のように述べている。

フォスターとアンダーソンの定義を少し補足すれば、人が日常生活において何らかの異常感・不快感を身体及び／または精神に抱き、それが自覚症状として本人に認知され、あるいは他覚症状として第三者にも察知されている場合、その症状が主観的でありつづけている場合、病い (illness) であって、医療機関や治療者によって診断行為が施された結果、何らかの病名が冠され (病名不明ということでもよい)、しかるべく治療行為が行なわれる可能性のある場合、それは疾病 (disease) であって、人は患者へと移行してゆくことになる。そして、疾病と病いとを総称して、病気 (sickness) と呼ばれることもある。⁴

また、医療人類学者ヤングによる定義も確認しておきたい。

医療人類学者ヤングは、人間が経験する病気の全貌を理解するために、〈病い (illness)〉〈疾病 (disease)〉〈病気 (sickness)〉の3つの区分を用いることを提唱している。／〈病い〉とは、症状も含めて、病者が経験する病気であり、〈疾病〉は、生物学的実体としての病気である。この2つの区分は、よく次のような病者と医者の関係において、対立的に捉えられることがある。病者にとつてみれば、どんなにありきたりな〈疾病〉であつても、それは常に固有の苦しみを伴った〈病い〉であるといえる。しかし、医者にとつて重要なのは、それぞれの患者が訴える〈病い〉の個性性などではなく、どの人に対しても同じ症状として現れる〈疾病〉のほうである。／またもう1つの区分である〈病気〉については、これらの〈病い〉と〈疾病〉をともに含む、包括的な概念として使われることもあるが、より分析的な意味では、病者と医者やそのまわりの人びとのやり取りから、病気が、社会的に経験されるようになる過程を捉える概念として使われることがある。⁵

フォスターとアンダーソン、そしてヤングによる病気の定義について見てきた。長く引用してきたが、どちらも概して、身体に現われた症状つまり病理学的な概念として「疾病 (disease)」を、社会や個別の患者によって枠組みが決められていくような文化的な概念として「病い (illness)」を分類しているのである。これらを踏まえると、ソントグや柄谷の指摘の前提にある「事実としての結核」は「疾病 (disease)」、そして「隠喩」や「意味」は「病い (illness)」に属するものだと考えることも出来る。

以上のような指摘を踏まえ、病理学的概念としての疾病に対して、文化的概念としての病いを考えてみると、当然、病いは様々な様相をもって現われてくることが予想できるであろう。そうすると、直接的な相関性を持たないイメージと疾病が結合される表象も、先の例のような「不如帰」に見られる「ロマン化」という隠喩に限らず、様々に生じ得ることが考えられる。実際にソントグは、「仰々しくも隠喩に飾りたてられた病気」として結核の他にもう一つ癌を挙げ、「結核とは対照的に、ロマンティックな性格のものには適しくない病気」として捉えられていたことを指摘している。つまり、病いは儂く美しいものとして表象される場合もあれば、絶望的で醜いものとして表象される場合もありうるのだ。

文化的概念としての病いをさらに広く考えていけば、病い自体が現実的な疾病から離れて不思議で奇怪なものとして表象されてもおかしくはない。例えば、日本の中世においては、病気は物の怪がもたらすものと考えられ、加持祈祷をすることが治療として定着していた。

このように、病いに関する表象では現実とは異なる様々な意味が付与され、あるいは現実とは異なるように語られる可能性があるのだ。

本研究では、このように病いに対して与えられた現実とは異なる意味やそれを語る行為を、幻想としての病いないし病いの幻想化と定義しておきたい。そもそも文学における「幻想」とは、トドロフによれば、「自然の法則しか知らぬ者が、超自然と思える出来事に直面して感じる「ためらい」のことである。「幻想は、読者もまた作中人物の世界に組み込まれていることを前提としているのだ。言いかえれば、幻想とは、語られた出来事について読者が抱く曖昧な知覚の事だと定義される。(略)／したがって、「読者のためらい」こそが、幻想にとつての第一条件である」⁷。つまり、「幻想」には読者の参与が求められるのだ。

そして、物語の語り手ないし登場人物と読者の共働によって生み出される病いの幻想を、本研究では、二つの位相で整理して考えることとしたい。簡潔に示せば、(一) 病理学的概念としての疾病を患った人物やその周辺環境が、他者ないし患者自らによって幻想的に語られる場合、(二) 疾病の有無にかかわらず、人間が抱く病いそのものに対するイメージが幻想化される場合、という二つの位相である。

具体的に、日本文学における病いの幻想の二つの位相の例を見ておこう。まず、(一) 病理学的概念としての疾病を患った人物やその周辺環境が、他者ないし患者自らによって幻想的に語られる場合としては、例えば広い世代に馴染みのある梶井基次郎の「檸檬」が挙げられる。「檸檬」では、肺炎カタルを患った「私」が「えたいの知れない不吉な塊」に抑えつけられていた時期を回想して語るが、「私」の目を通して認識された世界は絵画的な美しさをもって語られる。また、病いを患った婚約者との関わりがロマン的に描かれる堀辰雄の「風立ちぬ」なども例として挙げられるだろう。続いて、(二) 疾病の有無にかかわらず、人間が抱く病いそのものに対するイメージが幻想化される場合の例も挙げておこう。川端康成「たんぽぽ」では、「人体欠視症」という人の体が見えなくなる現実にはあり得ない不思議な病いを患った女性が登場する。他にも、安部公房の「カンガルー・ノート」に登場する男は、脛にかいわれ大根が生えるという奇病を患っている。このように、文学作品において、病いが幻想的に語られることは少なからず見られるのである。

さて、ここでもう一点考えなければならないことがある。それは、以上のような病いの幻想が、誰によって語られているのか、ということである。すなわち、文学作品の中で病いが幻想的に語られるときには、他者表象の場合と自己表象の場合があるということだ。さらに言えば、前者(他者表象)は、語り手が病いを患った他者や他者が患った病いを幻想的に語

るということで、後者（自己表象）の場合は、病いを患った自己や自己が患った病いを幻想的に語るということである。

これについても、具体的な例をみてみよう。まず、他者表象の場合の例を挙げる。例えば、先の柄谷も例にとった徳富蘆花の「不如帰」が分かりやすい例として挙げられる。「不如帰」では三人称の語り手によって、「武男」と病いを患った妻「浪子」のことが語られる。つまり、三人称の語り手によって病いを患った他者（ここでは「浪子」）が表象されているのである。他にも、横光利一の「春は馬車に乗って」も例として挙げられる。「春は馬車に乗って」は、三人称の語り手によって、「彼」とその病気の「妻」の物語が語られる。また、他者表象の場合は、一人称の語り手によって語られることも考えられる。例えば、梶井基次郎の「Kの昇天」は、「私」が重い病いを患った他者である「K君」のことをロマン的に語る。他にも、既に挙げた堀辰雄の代表作「風立ちぬ」は、一人称の語り手「私」が結核を患った他者である婚約者「節子」のことをロマンティックなイメージで語っている。次に、自己表象の場合の例も見ていこう。これも既に挙げた梶井基次郎「檸檬」が分かりやすい例である。肺炎カタルを患った「私」自身が、自分やその周辺環境を幻想的に語る。他にも、安岡章太郎「D町のほひ」では、「私」が、自らが患ったD町に赴くと必ず発症するという奇妙な病いについて語る。

多くの例を見てきたが、他者表象の場合は病いを患った登場人物本人ではない語り手が病いの幻想を他者に投影しているのに対し、自己表象の場合は、病いを患った語り手本人が病いの幻想を内面化している、ということに大きな相違がある。

本研究では、これらのうち自己表象の方に注目して考えていきたい。そこで、以上のように、一人称小説における病いを患った語り手が幻想的に物語内容を語る行為を、本研究では「病いを患った語り手による幻想的語り」と呼ぶこととし、分析を進めていくこととする。

第二節 病いと日本文学に関する先行研究

本研究の具体的な目的や方法を提示する前に、まず、先行研究を整理しておこう。

そもそも、日本文学における病いの表象に関する研究は多く為されてきたとは言えない。その中でも、日本文学における病いの言語表象について研究した最も新しい論考である木村巧『病の言語表象』（和泉書院、二〇〇六年）で整理されたものを手がかりに、論者が新たに付け加えたものも含め、文学における病いの表象、そして文学と病いの関係について論じられた先行研究をまとめていきたい。

まず、文学に表れた病いの表象の研究としては、第一節でも引用したスーザン・ソントグの『隠喩としての病い』（みすず書房、一九八二年）がある。また、サンダー・L・ギルマン『病気と表象―狂気からエイズにいたる病のイメージ』（ありな書房、一九九七年）は、人間がいかに病気を想像し、病者をどのように表象するかを広く研究した先駆的な研究である。さらに、ピエール・ダルモンの『癌の歴史』（新評社、一九九七年）では、癌と癌に付与されたイメージの歴史が詳細に分析されている。

次に、日本文学における病いの表象について言及された先行研究を見ていこう。藤井淑禎『不如歸の時代 水底の漱石と青年たち』（名古屋大学出版会、一九九〇年）では、夏目漱石を中心に結核と文学の関係について研究されている。続いて、同じく結核を取り上げた福田真人『結核の文化史』（名古屋大学出版会、一九九五年）では、近代日本における結核の文化史が、多角的な視点から論じられている。文学についても、柄谷も例示していた「不如歸」における肺病のロマン化をはじめ、森鷗外や正岡子規の作品について言及している。また福田真人は鈴木則子との共著『日本梅毒史の研究―医療・社会・国家』（思文閣出版、二〇〇五年）で梅毒の文化史についても論じている。そして前掲した木村巧『病の言語表象』（和泉書院、二〇〇六年）では、日本文学における、ハンセン病・HIV／エイズ・精神病・がん・障害、という複数の病気の表象を横断的に分析し、近代から現代の日本社会において病気とそのイメージがどのように流通していったのか、さらにそこから社会において患者への偏見や差別が構築されていく過程を明らかにしている。池田功『新版 こころの病の文化史』（おうふう、二二〇〇八年）では、日本の近、現代文学においてこころの病いがどのように言葉によって描かれ、それがどのように克服されてきたのかが明らかにされている。

さらに、病いのイメージの研究に限定せず、広く病いと日本文学の関係について論じられた研究には次のようなものがある。立川昭二は、『病いの人間学』（筑摩書房、一九九九年）で、自分あるいは家族の病いをテーマにした日本の現代文学作品を取り上げ、作中人物または作者が病いとどう向き合ってきたか、それによって何を学び何を得たかということを探ったうえで、私たち自身がどのように病いと向き合っていくべきかを示唆している。荒井裕樹『隔離の文学 ハンセン病療養所の自己表現史』（書肆アルス、二〇一一年）では、ハンセン病と文学の関係について多角的に考察しながら、隔離された患者たちが自分たちの生命の意味をどのように表現して来たのかということ明らかにしている。福田和也『病気と日本文学 近現代文学講義』（洋泉社、二〇一二年）では、病気の人物が登場する作品や、病気を患った作家による作品を広く取り上げ、各文学作品と病いの関係について論じてい

る。ほかに、文学に現れた神経症的症状を検討した、大本泉・後藤康二・二木文明・北條博史・千葉正昭編『神経症と文学―自分という不自由―』（鼎書房、二〇一四年）などがある。

この他にも、病跡学の観点から、病いを患った作家によって書かれた文学作品の分析を個別に試みた先行論も数多く見られるが、本研究の趣旨とは外れるのでここでは省略する。

さて、第一節で、本研究では、病いを患った一人称の語り手本人病いを患った自己や自己を取り巻く世界、または自分の患う病いを幻想的に語る自己表象を問うていきたい、ということ先んじて述べた。しかしながら、先行研究を概観すると、そのような病いを患った一人称の語り手による自己表象に焦点化した研究は、未だ為されていないのである。

第三節 研究の目的・方法

では、病いを患った語り手による幻想的語りを問うていく意義とは何なのか。

そもそも、先に引用して来たソクタグや柄谷、また木村など、先行論の多くは、本研究で言うところの病いの幻想を批判的に捉えている。冒頭に引用したソクタグの研究では、「病気とは隠喩などではなく、従って病気に対処するには―もつとも健康に病気になるには―隠喩がらみの病気観を一掃すること、なるだけそれに抵抗することが最も正しい方法である」ということだが、それにしても、病者の王国の住民となりながら、その風景と化しているだけばばしい隠喩に毒されずにすますのは殆ど不可能に近い」とされている。そのため、ソクタグは研究の目的を「そうした隠喩の正体を明らかにし、それから解放されるため」とし、病いに付与される様々な「隠喩」の作用を問題視している。先に言及したように柄谷も「恥ずかしいほどの結合」と述べている点で、文学と「意味」の結合、つまり病いの幻想を批判的に捉えている。

たしかに、病いについて、病理学的な疾病としての意味ではなく、本研究で言う病いの幻想、特にここではそのネガティブなイメージが蔓延させられているとき、病いを患った人たちは、疾病としての病いの身体的な苦痛のみならず、その病いの幻想がもたらす病気の現実とは異なる別のイメージまでも多かれ少なかれ背負わされることになる。

しかし、文学作品において上記の問題を考えたとき、そこに登場する病いを患った当事者、すなわち病いの幻想をもって表象されてきた登場人物たちは、ソクタグが言うように本当に二重の苦しみを一方的に強いられているのだろうか。さらに、このような病いを患った登場人物が自ら物語を語っている場合、すなわち先に述べた、病いを患った語り手による幻想

的語りの場合はどうだろう。ソングの指摘する通りに考えるならば、病いを患った一人称の語り手によって物語が語られるとき、その人物は疾病としての病気に苦しめられるだけでなく、病いの幻想に取り付かれ、翻弄される被害者であるとする一元的に捉えてしまっているのだろうか。もしそうであるならば、病いの当事者自らが、病いの幻想の発信そして蔓延に因らずも加担し、被害者でありながら加害者であるという両義性を持ってしまおう。

以上の問題を解き明かしていくために、病いを患った語り手による幻想的語りについて考える必要があるだろう。病いを患った一人称の語り手が幻想的な語りを遂行するとき、病いは彼らの身体だけではなく、彼らの語っている物語全体に影響を与えている可能性がある。そして当然、読者は彼らによる幻想的語りによって異化されたイメージを取り入れながらテキストを受容することになる。文学作品における病いの表象を考えると、まず病いを患った一人称の語り手たち自身が、どのように自分の患う病い、ないしは病いを患った自分と自分をとりまく世界を語っていくのかは、見過ごされてはならないことであるはずなのだ。

以上のような背景から、本研究では、日本近代文学における「病いを患った語り手による幻想的語り」を研究対象とし、病いを患った一人称の語り手が病いを幻想的に語るプロセスと、そのような語りを遂行することの意義を見出していきたい。

なお、先に病いの幻想を、(一) 病理学的概念としての疾病を患った人物やその周辺環境が、他者ないし患者自らによって幻想的に語られる場合、(二) 疾病の有無にかかわらず、人間が抱く病いそのものに対するイメージが幻想化される場合、という二つの位相で整理した。これを特に一人称の語り手が病いの幻想を語る場合で考えると、この二つの位相は、(一) 病理学的概念としての疾病を患った人物が、自らの身体や精神、あるいはそれを通して接する世界を幻想化して語る場合(二) 自分が患った病いそのものに対するイメージを幻想化して語る場合、というように捉え直せるだろう。

以下、具体的な研究方法の手順を示す。

本研究では、病いを患った語り手が幻想的に語る作品として、四つの作品を取り上げ、これらの作品のテキストを詳しく分析しながら問題について明らかにしていく。なお、柄谷の「第三の新人」にいたるまでの近代文学には、結核と文学の恥ずかしいほどの結合がある」との指摘、そしてその始まりが明治三一年の「不如帰」であるとの指摘を参考にし、本研究では、「不如帰」以降「第三の新人」までの大正・昭和期の四つの作品を取り上げることとした。第一章では、先の例でも挙げた梶井基次郎「檸檬」を取り上げる。「檸檬」では肺

尖カタルを患った「私」が自分の認識した世界を絵画的な美しさをもって語る。第二章では、急性肺炎を患った「僕」が、まるで天使の気まぐれで自分の命が左右されているかのように、病いに侵された自分の状況を幻想的に語る堀辰雄の「死の素描」を取り上げる。第三章では、伊藤整の「病歴」を取り上げる。「病歴」では、「私」が、カリエスや失明に至る眼病を患った疑念に苛まれる様子が語られ、ついに自分には重い病いはやって来ないと高をくくったところで、肺結核の兆しが現れてくる。第四章では、吉行淳之介の「決闘」を対象として分析していく。「決闘」では、語り手「僕」の友人Kが蝦を食べたとき喘息の発作が起こるようになったため、しきりに「僕」の方へ自分の蝦喘息を「移住」させようと干渉した結果、「僕」は自分の体に蝦喘息が「移住」してきていることを確信する。

これらの四つのテキストにおける幻想的な語りを分析する。具体的には、テキストにおける病いを患った語り手たちが、病いの幻想によって自己と自己を取り巻く世界を語っているプロセス、あるいは逆に病いの幻想を語り構築していくプロセスを可視化する。そしてそのように病いを幻想的に語ることで、彼らにとってどのような意義があるのかを見出ししていきたい。

さらに、以上を明らかにすることは、決して、個々の作品の固有性を提示することだけに終始することはない。病いの幻想的な語りを問うていくことは、私たちが生きる社会における病いを取り巻く言説を脱構築するための視座を獲得することにもつながるだろう。

私たちは、誰もが病いの言説と隣り合わせて生きている。「病いを患った語り手による幻想的語り」に耳を傾け、問うていくことは、そのような社会の中で私たちがどのように生きていくかを問うていくことと同義なのである。

第一章 梶井基次郎「檸檬」における幻想と病い

第一節 「檸檬」について

第一章と第二章では、(一) 病理学的な概念としての疾病を患った人物が、自らの身体や精神、あるいはそれを通して接する世界を幻想化して語る小説を分析していききたい。本章では、梶井基次郎の「檸檬」を取り上げる。

梶井基次郎の「檸檬」は、同人誌『青空』(一九二五年一月号)に発表された短編小説である。初刊は『檸檬』(武蔵野書院、一九三二年五月)であり、その後も現在に至るまで次々と再収録され、世代を問わず誰にも馴染みのある作品として受け入れられている。作品の梗概は以下の通りである。えたいの知れない不吉な塊が「私」の心を始終押さえつけていた。その頃の「私」は、見ずばらしくて美しいものに引きつけられた。また、

「私」は時々、自分がいる京都から遠く離れた市に來たような錯覚の中に現実の自分自身を見失うのを楽しんでいた。ある朝「私」は、友達の下宿から彷徨い出て、ある果物屋で足を留めた。その店で珍しい一つの檸檬を買った「私」は、幸福であった。どう歩いたのか「私」は、最後に丸善の前に立った。その頃の自分にとって重苦しい場所だった丸善に、今日はずかずか入っていった。だが、心を満たしていた幸福な感情は逃げて行った。そこで袂の中の檸檬を思い出す。本の色彩をゴチャゴチャに積み上げて、その城壁の頂に恐る恐る檸檬を据え付けてみた。そしてそのまま何食わぬ顔で外へ出た。丸善の棚へ金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けてきた奇怪な悪男が私で、もう十分後にはあの丸善が大爆発するのだったらどんなに面白いだろう。「私」はこの想像を追求しながら、京極を下つて行った。

作者の梶井基次郎(一九〇一〜一九三二)は、三高理科甲類に入学したものの、学業よりも文学に傾倒し、肋膜炎にかかって頽廢的生活を送るようになる。その後東京帝大英文科に入学し、中谷孝雄、外村繁らと同人誌『青空』を創刊した。三二歳のとき、「中央公論」に作品を発表しようやく文壇に認められるようになったが、間もなく肺結核で若くして亡くなった。⁹

「檸檬」はこの同人誌『青空』の創刊号に梶井が載せた作品である。梶井の京都時代の生活を材料にした未完の小説「瀬山の話」の一部を独立させたものだった。「檸檬」について、現在まで多くの研究が重ねられ、その論点も多岐にわたっている。特に「檸檬」は、梶井自身の体験が作品のモチーフになっていると捉えられてきたことから、作家の梶

井基次郎と作品（または作中の「私」）の強い関連性を前提として、読みが形成されてきた傾向がある。作品の内容の解釈として、やはり丸善での「私」の行動の意味や、その行動につながる「其頃」の「私」の内面については大きな観点の一つとなってきた。

一方で、語られる内容だけではなく、一人称の語り手「私」が自分自身の過去の経験を回想して語るという語りの構造も作品の大きな特徴である。語りに注意が向けられた論考は、「檸檬」の草稿として捉えられてきた「瀬山の話」等で語られる「檸檬」に通じるエピソードを参照しながら、「檸檬」の語りの構造や「私」について触れられたものをはじめ、多くの論考で「私」が過去を回想して語るという語りの構造の視点が取り入れられている。

本章では、過去の先行研究を踏まえながら、病いを患った「私」がどのように幻想的に病いを語っていくのかということ視座として、「檸檬」のテクストを分析していきたい。

第二節 先行研究

本節では、まず「檸檬」に関する先行研究を概観しておきたい。先述したように、梶井基次郎「檸檬」は過去に膨大な先行研究が蓄積されてきた。「檸檬」の研究史について鷲只雄は「梶井を論じて「檸檬」にふれないものはないといってもよい程「檸檬」論は夥しく堆積しており、また問題点も多岐に渡っていて、それらの一つをとりあげて問題の所在を明らかにし、研究史を腑分けし、整理して示すだけでも与えられた紙数の半分は消えてしまうと思われる」とし、その中でも梶井研究の課題として「梶井論で今日最も要請されるのは作品論であり、及ぶ限り詳細緻密にその内容を明らかにし、外部との比較検証を施すべきであると思う。特に作品の「読み」は第一になさなければならないものであるにもかかわらず、事態は必ずしもそうはなっていないのが現状（略）」と述べている¹⁰。この鷲の指摘は一九九九年時点でのものではあるが、現在も状況はさほど変わっていない。また、「檸檬」を論じる際の問題点の一つとして、丸善で檸檬を置くという行動にも繋がる「えたいの知れない不吉な塊」とは何であるのかは先行研究で終わりなく論じられてきたが、同じく鷲が「実はこれについてはさまざまな諸説がとびかかっていて代表的なものにとりあげてみても、生の不安・社会的不安・時代的不安・青春の鬱屈憂悶・倦怠・病的（肺結核）不安・世紀末的デカダンス等々があり、その実体は作品の中であいまいなままに放置されて、追及はされていない。」と過去の研究をまとめている。

本研究では、「病いを患った語り手による幻想的語り」の観点から作品を分析していくため、以下では大まかに、「檸檬」のテキストの「語り」に注目されたものを整理する。

(一)では、「檸檬」のテキスト生成について論じられる中で語りについて分析されたもの、(二)では「檸檬」の作品論における語りの構造の捉えられ方を整理していく。

(二) テキスト生成

「檸檬」のテキストは、詩篇「秘やかな楽しみ」、習作「瀬山の話」等が母胎となって成立したことが知られている。これらの「檸檬」の草稿として捉えられてきた作品の中に見られる「檸檬」に繋がるエピソードの語られ方の変化を参照しながら、「檸檬」の語りの構造や「私」について触れられたものがある。

例えば、福永武彦は、次のように述べている。

「ここで、決定稿『檸檬』が過去のある時期の回想という形式で書かれていることに注意しよう。この作品の第二の段階である一九二三年の手帖においては、「檸檬」の挿話のあとにすぐ引きつづいて、『なんと悲しい遊戯だつたのだらう』。私はその頃の私自身をいたはり度い様な気になりつゝもその馬鹿気た狂気をはかなく思つた」ということばが見出される。決定稿においては、「その頃」とか「その日」とか過去を示すことばがいくつか散見するものの、日本語独特の曖昧な現在時と過去時の交錯によって、過去にあった物語という性格がそれ以前の草稿にくらべてはかなりうすれている。それは、過去の錯乱をもつばら感覚をとおして回想し単純化してゆくにつれて、いわば「一顆の檸檬の形象だけがげざやかに残され」（山本健吉）浮かび上がっていったのだと言えよう。そうした感覚をとおしての回想と単純化は、諧謔の文体によってしか獲得されないのである。／諧謔の文体は自己の全存在が浸った心象風景をさらにその横ではなれて見る澄んだ眼と、感覚の汎濫を統御する言語の操作とを必要とするものだ。こういう、感覚する自我とその横にひっそり立つ観察者としての自我というふたつの自我の共存、——それが『檸檬』以後のすべての作品を一貫して流れる主導調である。¹¹

福永が、草稿と比較する中で指摘した、「檸檬」のテキストが、過去にあった物語の性格が薄いという点、さらに、「感覚する自我とその横にひっそり立つ観察者としての自我」というふたつの自我の共存」があるという点には注目できる。

また、三好行雄は、「檸檬」のテキスト生成の過程をたどる中で、次のように述べている。

「檸檬」にもたしかに〈其頃の私にとつては〉、〈それがあの頃のことなんだから〉などという表現が散見し、小説の事件が過去のある時点に設定されているのは明らかである。しかし、第二稿および「瀬山の話」の場合のように、読者は語り手の〈現在〉にたちどまる必要はない。〈私〉の意味、つまり〈あの頃〉を書く語り手としての意味がいちじるしく希薄なのである。比喻としていえば、語り手の〈あの頃〉と〈いま〉とのかさなる場所で、画集のうえにおかれた一顆のレモンが〈大爆発をする〉。このことは、「瀬山の話」から「檸檬」への過程で、「瀬山の話」の第二のエピソードが切り落とされた事情とも無関係ではない。結果として、〈あの頃〉と〈いま〉とをつらねる無頼放埒な生活の事実が小説の後景にしりぞくことになる。「檸檬」のなかにある、暗くゆきくれたアンニユイに惹かれ、そのアンニユイが作者のどんな生活の形態に胚胎したかという疑問を読者がもし抱いたとしても、この小説は決してそれに答えない。¹²

三好の場合も、「檸檬」のテキストが「〈あの頃〉を書く語り手としての意味がいちじるしく希薄」であることを指摘しているのは、福永が過去の物語としての性格の薄さを指摘しているのと類似している。

(二)「檸檬」作品論の中でのテキストの語りの捉えられ方

次に、「檸檬」の語りの特徴について、先行研究ではどのように捉えられてきているのかを整理する。

まず、磯貝英雄は、「檸檬」の文体について、梶井基次郎作品全体の特徴を踏まえながら次のように指摘している。

さきに指摘したように、幻想場面が重ねて出てくるが、作者は、決して、想像世界にのめりこみ、想像のおもむくままに筆をとるといった叙述はしない。(また、かれはそんな資質の人でもない。)作者は、それを、外がわから、さめた意識をもって、冷静に、見つめ、分析し、対象化して、そのあるべき位置にきちんと据えるのである。この作品の文体は、極めて論理的であり、分析的である。¹³

磯貝の指摘はあくまで語り手ではなく「檸檬」における作者・梶井の作品の書き方に關する指摘であるが、それが「外がわから、さめた意識をもって、冷静に、見つめ、分析

し、対象化して、そのあるべき位置にきちんと据える」ものであるということには注目できる。

内田照子の指摘も磯貝の指摘に通じるところがある。

この作品の二つの表面上の主題でもある二つの偽の幸福、束の間の幸福を得た「私」は、前者では「私は街の上で」と書かれ、後者では「街の上の私」と書かれていることに注目するのだ。束の間の幸福な状態にあり、微笑んでさえいる「私」を「街の上」にいる像として捉えているのである。これは束の間の幸福に微笑んでいる「私」とは別に、もう一人の「私」という目が遠くから、まるで「街の上」にいる一個の人間という物体を眺めることによつて可能になった表現である。「私」はこの時点で分離してしまっている。¹⁴

内田は「檸檬」のテキストにおける「私」の語りについて、街の上の「私」とそれを眺める「私」が「分離してしまっている」と述べている。前記の磯貝では梶井の文体の特徴として指摘されていたが、「私」の語りに落とし込んで、登場する「私」とそれを傍らで見る「私」の分離が捉えられるのである。

一方で、日比嘉高は、次のように指摘している。

「檸檬」というテキストの焦点が、そうした彼の能動性の発揮におかれているのだとしたら、その出来事を回顧的に振り返る語り手の企図もそこを起点に再考しうるかもしれない。／（略）／もちろん、それは想像力による一瞬の爆発にすぎず、閃光のあとすぐに消え去るような抵抗には違いない。それでもなお、この出来事を通じ、

「私」は彼の病う身体と蝕まれる心が、きつかけさえつかめればたとえ一時であっても晴らす可能性はある可変的なものだということを知ったのではないだろうか。だからこそ、この事件のあった時代を「あの頃」として振り返る語り手は、今この檸檬

の話語るのであり、その話を語るのに際し、めまぐるしいまでに身体と空間と心とを錯綜させて語つたのであろう。¹⁵

磯貝や内田が「私」の「分離」、すなわちテキストの「私」を傍らで見ている「私」を指摘しているのに対し、日比は「めまぐるしいまでに身体と空間と心とを錯綜させて語つた」と指摘している。この点においては、むしろ過去の物語としての性格の薄さを指摘していた福永や三好に近いともいえる。

柏倉康夫は、次のように指摘している。

「結局私はそれを一つだけ買ふことにした。(略) 何といふ不思議な奴だらう。」／
(略)／ところでききに引用した一節で注意すべきなのは、これが時制の異なる二つの文章から成っている点である。つまり前半は偶然からレモンを買った日の行動と心の動きの記述である。一方「あんなに執拗かつた憂鬱が、」以下は、この文章を記述している時点での感慨である。精神の大禍時を通過しているまさにその時の緊迫感と、それをすぎ去った過去のこととして眺めている余裕。このコントラストが、この一節に味つけをし、読む者に一種の安心感をもたらすのである。そしてこうした自己を相対化する態度は、単にこの一節だけでなく、「檸檬」全体の一つの大きな特徴でもある。／たとえば掌にあるレモンの重みを、「総ての善いもの総ての美しいものを重量に換算して来た重さ」と思ってみたりしたことを、「思ひあがつた諧謔心」のなせるわざだと断ずる現在の「私」は、一個のレモンに燃えあがつた当時の自分を客観的に見て、相対化している。しかもそうしたかつての自分を、愛情のこもった気持ちで眺めているのである。「何がさて私は幸福だったのだ。」という文末に、その感慨がこめられている。¹⁶

柏倉は、語る時点の「私」と、語っていることを実際に経験した時点の「私」を整理して捉えている点で、先に挙げた磯貝や内田に通じる。その上で、「当時の自分を客観的に見て、相対化している。」と述べている点に注目できる。

佐藤昌大も、「檸檬」の語り構造については先の柏倉と同じように、「其頃」の「私」を、語る時点の「私」が相対化して語っていると捉え、次のように述べている。

作品の中心をなす「私」の物語を「其頃」(モノローグでは「あの頃」と言い表すのは、他でもない語り手の「私」である。つまり、語り手の「私」は現在の地点に立つて、過去(「其頃」「以前」)の自分を客観的に回想し語っているのだ。「其頃」と「以前」という二つの「私」が織りなす檸檬の挿話を、語り手の「私」が現在の地点から語る。(略) 梶井の目を借りた語り手の「私」は、相対化された〈私〉の物語をそこに見出す。¹⁷

最近では、大塚常樹が、「檸檬」の語りにおける焦点化した分析を行い、そのテキストにおける言語戦略を明らかにしている。次に引用する。

本テキストの語りは「私」が「私」の行動を語る、すなわち《語る私》と《経験する(した私)》に分節化した語りである。「私」が「私」を語る状況では、非客観的であつてもそれを相対化する視点はなく、また過去の《経験した私》と現在の《語る

私』の価値観が一致するとは限らない。換言すれば物語られる「私」は、語りの現在において捉え直された「私」である。従って、最終的には現在の「私」は、なぜ「その日」の出来事を語る必要があるのか、その目的と欲望を探る必要がある。特にこのテキストは「察しはつくだろうが」という象徴的な一文によって明示されているように、《聞き手》の存在を意識した語りである。またメタテキストの次元では、梶井という若手作家が「青空」という同人雑誌の創刊号に載せるために意気込んで作成した《小説》である。すなわち、「檸檬」のテキスト分析は、最終的には、聞き手を意識した「私」の語る目的・欲望と、同時に浮上する作者の対読者戦略を考察することになるのだ。¹⁸

大塚は「檸檬」の語りについてかなり緻密に考察し、その際、「私」の語りは「語る私」と「経験する（した私）」に「分節化」した語りであるとして分析を進めている。

以上のように、「檸檬」のテキストにおける「私」の語りについて先行研究の中でどのように捉えられてきたのかを整理してきた。過去には、福永の「過去にあった物語という性格」が薄い、そして三好の「〈あの頃〉を書く語り手としての意味がいちじるしく希薄」である、などといった指摘があった。最近では、様々なレベルではあるが過去の「私」と語る「私」をある程度分かれたものとして捉えられることが多いことが分かる。以上のような先行研究をふまえつつ、本稿では病いの幻想的な語りがどのように行われるかに焦点を当てて、以下、分析していきたい。

第三節 「檸檬」における幻想と病い

まず、「檸檬」のテキストにおける病いの位置づけについて確認しておきたい。

「檸檬」の語り手である「私」は、「結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない」（7頁）、「その頃私は肺尖を悪くしてめて」（10頁）とあるように、肺結核の初期症状である肺尖カタルを患っている。

冒頭で語られる「えたいの知れない不吉な塊」についても、先行研究で多様な解釈が示されてきたように、その正体を一元化はできないものの、少なくともその一要素として病いが関連していることは間違いない。つまり「檸檬」の語り手が患っている病いは、それが何らかの形で語りや物語内容に影響を与えている可能性がある、ということ踏まえておく必要があるだろう。先行研究でも、例えば磯貝英夫が「不吉な塊」の提示のあとで、たとえの形で、酒が、また、否定形式で、肺尖カタルと神経衰弱と借金とが書きつけ

られているが、こういうものを、その扱いのゆえにあっさり消去するような読みかたをするとしたら、はじめから落第である」¹⁾とされているなど、病いを含めて「私」が否定するものこそ「不吉な塊」の背景として提示されているとする説もある。

実際に、「私」が好きだと語る一顆の檸檬についても、「私」がその良さを感じるための一つの要件として、実は病いがある。村山麗²⁾が、「檸檬」における「私」が、心身ともに《病》の状態にあることを新しい視点として取り入れ³⁾て「檸檬」を再考察した中で、「身体の一部である皮膚感覚によってレモンを知覚することが、語る現在の「私」からは「不可思議」に思えるほどの影響をなぜ及ぼしたのか」と問題提起した。そして村山は、テキストの中における、

その檸檬の冷たさはたとへやうもなくよかつた。その頃私は肺尖を悪くしてゐても身体に熱が出た。事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかす為に手の握り合ひなどをして見るのだが私の掌が誰れのよりも熱かつた。その熱い故だつたのだろう、握つてゐる掌から身内に浸み透つてゆくやうなその冷たさは快いものだつた。

という箇所を取り上げ、「語る現在の「私」が「心地よさの理由を、肺尖カタルによって《病》んだ状態に見出している」ということを指摘している。村山の指摘と同様に考えると、「そしてふかぶかと胸一杯に匂やかな空気を吸込めば、つひぞ胸一杯に呼吸したこと」のなかつた私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇つて来て何だか身内に元気が目覚めて来たのだつた」(二二頁)についても、「つひぞ胸一杯に呼吸したこと」のなかつた「私」は檸檬のよさを感じられたのだと言える。

以上のように、「其頃」の「私」の経験の根底には、「私」自身が否定しているのとは裏腹に少なからず病いが絡んでいるのである。そして檸檬の良さとの出会いの背景にも、「私」の病いは関係している。したがって、特に物語のモチーフとなった檸檬を爆弾に見立てるといふ幻想にも、それを語る語り手自身の病いが強く影響しているはずである。

この「檸檬」における「私」の病いがもたらす幻想的な語りを考えるにあたって、次の二つの資料を見てみたい。まず、蓮實重彦が、「健康という名の幻想」の中で、人は「首筋から肩へとかけて背後から寡黙に注がれていたはずの親しいぬくもりが不意に途絶えてしまったり、目をつむったままでも細部を克明に再現できるほど見馴れていたあたりの風景にいきなり亀裂が走りぬけ、幾重にも交錯しながら数をますその亀裂が汚点のように醜く視界を乱してしまった」といふような経験をすると、「こちらは何も悪いことはしていないのに、向こうからのび寄ってきた邪悪なる意志が、この崩壊を、この喪失をあたり

に波及させたのだと無理にも信じこむことで、その取り乱したさまを何とかつくるおうとする²¹、などとしながら、人がある崩壊や喪失を経験する過程について詳細に記述している²¹。医療人類学の研究者である小林昌廣は、この蓮實の記述をまとめつつ、次のように指摘している。

目をつむったままでも細部を克明に再現できるほど見馴れていた、あたりの風景にいきなり亀裂が走り抜けた時に、病いは始まる。この瞬間、私に接していた世界の表情が変化したわけであり、自分と親しみのある光景との間に元来成立していた調和ある距離感が奪われ、自然で違和感のない遠近法的構図にズレが生じてきて、いたずらに視線を刺激するばかりの猥雑な環境へと変容し、いわば「畸型化した光景」が突然に眼前に現われるのである。そしてそのような事態がいつの間にか日常化してしまふと、人は「こちらは何も悪いことはないのに、向こうからのび寄ってきた邪悪なる意志が、この崩壊を、この喪失をあたりに波及させたのだと無理に信じこむ」ことで、不意の変容を取り繕おうとする。(略) 自分の中に、ぼっかりと空洞のようなものが口を開けている。だが、いつまでもその不幸を嘆き悲しみ、郷愁とのみ戯れていても始まらないので、この空洞と距離を埋めることで、自分にこそふさわしい生を回復しなければなるまい (略)。²²

小林の指摘によると、まず「目をつむったままでも細部を克明に再現できるほど見馴れていた、あたりの風景にいきなり亀裂が走り抜けた時に、病いは始まる」。そしてさらに小林は、「そのような事態がいつの間にか日常化してしまうと、人は「こちらは何も悪いこととはしていないのに、向こうからのび寄ってきた邪悪なる意志が、この崩壊を、この喪失をあたりに波及させたのだと無理に信じこむ」ことで、不意の変容を取り繕おうとする」と述べる。

この小林の指摘を踏まえて、「檸檬」における「私」の語りを考えると、「私」も「細部を克明に再現できるほど見馴れていた、あたりの風景にいきなり亀裂が走り抜けた」経験をしている。具体的に見てみよう。

(ア) 以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなつた。(7頁)

(イ) 生活がまだ蝕まれてゐなかつた以前、(略) 然し此処ももう其頃の私にとつては重くるしい場所に過ぎなかつた(8～9頁)

(ウ) 以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだらう。一枚一枚に眼を晒し終つて後、さてあまりにも尋常な周囲を見廻すときのあの変にそぐはない
気持を、私は以前には好んで味つてゐたものであつた(12頁)

そして「私」は、以上のように自分の認識が変容してしまつたことについて、「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧へつけてゐた」(「頁」)ことが原因であると語る。これは小林の言う「こちらは何も悪いことはしていないのに、向こうからのび寄つてきた邪悪なる意志が、この崩壊を、この喪失をあたりに波及させたのだと無理に信じこむ」ということに通じる。

このように蓮實と小林を参考にして「檸檬」における病いの幻想的な語りを考えてみると、「私」は病いによつて自分が慣れ親しんで来たもの、「私」においては特に自分の心を魅了して止まなかつたものの見え方に不意な変容がおこり、その結果、病いではなく「えたいの知れない不吉な塊」に原因を帰結させていることが分かる。

すなわち、「檸檬」における「えたいの知れない不吉な塊」はテキストの冒頭で語られてはいるものの、実は病いによつて「私」の慣れ親しんだ日常が破壊された結果、その原因として後から浮上させられたものなのだと考えることが出来る。そしてこのように考えた時、「えたいの知れない不吉な塊」という、「檸檬」の物語の根幹をなす壮大な幻想は、病いが幻想化されたものである、と考えることが出来る。

第四節 「錯覚」・「想像」と病い

さて、第三節で引用した小林の中に「自分の中に、ぽっかりと空洞のようなものが口を開けている。だが、いつまでもその不幸を嘆き悲しみ、郷愁とのみ戯れていても始まらないので、この空洞と距離を埋めることで、自分にこそふさわしい生を回復しなければならぬ」とあるように、「自分にこそふさわしい生を回復」するためには、自分の中に出てしまった空洞との距離を埋める必要がある。

結論を先んじて述べてしまえば、「檸檬」における「私」がこの「空洞との距離を埋める」方法こそ、「錯覚」や「想像」だと言える。テキストの中で、直接「錯覚」や「想像」という言葉が出ているところをまず見てみよう。

(エ) 時どき私はそんな路を歩きながら、不図、其処が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか―そのような市へ今自分が来ているのだ―といふ錯覚を起さうと努める。(略)錯覚がやうやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の

絵具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の錯覚と壊れかけた街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失ふのを楽しんだ。(178頁)

(オ) もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだらう。わたしはこの想像を熱心に追求した。(13頁)

以上のように直接「錯覚」や「想像」という言葉が出て来る箇所以外にも、「私」は作中「錯覚」や「想像」を繰り返している。これらに総じて言えることは、「私」がテキストの中でこの「錯覚」や「想像」を遂行するときには、一貫して、極めて自覚的にそれらを行っているということである。

また、引用の(オ)に繋がる、檸檬を爆弾と見立てて丸善に据え付ける行動は、「檸檬」の物語の中でも、特に大きな幻想の経験である。この「檸檬を丸善に据え付ける」という行動について、語りの面からもより詳細に確認しておきたい。

「檸檬」では、作品全体を通して「私」の「其頃」の経験が語られるが、「ある朝」(6頁)以降は「其頃」の中でも時間が特定される。よってまず、テキストを、「ある朝」を境として次のような(前半)と(後半)に分けて考えてみたい。

(前半) えないの知れない不吉な塊が私の心を始終壓へつけていた。く書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取りの亡霊のやうに私には見えるのだった。

(後半) ある朝―其頃私は甲の友達から乙の友達へといふ風に友達の下宿を転々として暮してみたのだが―く京極を下つて行った。

具体的に見ていこう。(前半)は、「其頃」の「私」がどのような状況に置かれ、どのような生活を送っていたのか、を大まかに語っている。すなわち、「其頃」における、ある特定の出来事や経験を語るのではなく、「其頃」に繰り返し経験したことを、一括りにして語っているのである。それに対して、(後半)では、具体的な「ある朝」にはじまる一日の経験を取り上げて語っている。ここでは、「果物屋で檸檬を買った」、そして「檸檬を丸善に据え付けた」経験が語られる。すなわち「私」は、(前半)とは異なって、自分が過去に経験したある特別な一回の経験、つまり寺町の果物屋で檸檬を買ってそれを丸善の本の城に据え付けるという一連の行動を、一度だけ語っているのだ。これらの語り方は、ジュネットの物語の時間の理論でいえば、(前半)は括複法、(後半)は単起法を用いて語られていることになる。このように、「ある朝」以前と以後で語りの性質が大きく異なっていることが分かる。

以上のような（前半）と（後半）の語りの性質の違いを踏まえたとき、「私」は（後半）の「ある日」に経験した出来事を語ることを前提として、「檸檬」のテキストを語りはじめている、と考えることが出来る。「私」は過去のことを次々と想起しエピソードを生成していった結果「檸檬を丸善に据え付けた」という最終的な経験を語っているように一見思える。しかしながら、以上のように（前半）と（後半）の語りが、徐々に一つの出来事へと収斂していくように、いわば二段階構成のように語られていることから、（後半）の「ある日」の出来事に実は重きが置かれている、というふうに考えられる。このように「檸檬」のテキストは、「ある日」の経験、特に「檸檬を丸善に据え付けた」という経験を語ることを目的として語り始められているのである。それは、特に（後半）の中でも、「今日は一つ入つて見てやらう」（二頁）以降、丸善の中での出来事については、それまで頻繁に交えられていた「一体私はあの檸檬が好きだ」（10頁）、「それがあの頃のことなんだから」（二頁）といった、語る現在の時点での「私」の感情が一切語られなくなることから言える。

そして、「私」の語りが「檸檬を丸善へ据え付ける」行動の語りに収斂していることは、次のことから見て取れる。引用（カ）〜（ク）を見てみよう。

（カ）そして街から街へ先に云つたやうな裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立留つたり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、たうとう私は二条の方へ寺町を下り其処の果物屋で足を留めた。（6頁）

（キ）結局私はそれを一つだけ買ふことにした。（10頁）

（ク）何処をどう歩いたのだらう、私が最後に立つたのは丸善の前だった。（11頁）

以上の引用について、（カ）は檸檬を購入する果物屋に到着したところであり、「たうとう」という言葉で語られる。そして（キ）は、檸檬を実際に購入したところで、「結局」と語られる。そして（ク）は、檸檬を爆弾として据え付ける舞台となる丸善にいよいよ辿りついたところで、「最後に」と語られる。例えば「最後に」という言葉からは、「私」の意識の中で、丸善がこの回想の語りにおける「最後」の舞台なのだという意識がはたらいていることがわかる。「たうとう」、「結局」についても同様に考えることができ、「果物屋で足を留めた」こと、「それを一つだけ買ふことにした」ことが語りの目標地点であるのだという意識が、「私」の中ではたらいていることがわかる。このように、「檸檬」における「私」の語りは「檸檬を丸善に据え付けた」というエピソードの語りに強く集約されていっているのである。

以上のようなことから、まず初めに確認したように、病いに起因する「空洞」との「距離をうめ」、「自分にこそふさわしい生を回復」するため、すなわち病いに起因する「えたいの知れない不吉な塊」に対抗し「自分にこそふさわしい生を回復」するための手段として、「私」は極めて自覚的な「錯覚」や「想像」を遂行していることを指摘した。そしてその中でも、「檸檬を丸善に据え付けた」という経験は、語りの面から見ても特に「私」にとって重要な体験なのである。

このように、「檸檬」における「私」が、「自分にこそふさわしい生を回復」するため、病いによって生まれた「空洞との距離を埋める」方法こそ、「錯覚」や「想像」による幻想だったのがある。そしてその「想像」や「錯覚」の経験の中で最も重要だったのが、「檸檬を丸善に据え付ける」という行動である。そして「私」は、この「錯覚」や「想像」を巧みに操り、病いによって変容してしまった風景を矯正することで、「自分にこそふさわしい生を回復」しようとしているのである。

第五節 本章のまとめ

本章では、梶井基次郎「檸檬」について、肺炎カタルを患った「私」によって、自己が認識する世界を幻想的に語る過程を分析して来た。

まず、テキスト全体が絵画的な美しさをもって幻想的に語られるものの、その背景には病いが潜んでいるということが明らかにできた。そして、テキストの冒頭で語られている「えたいの知れない不吉な塊」が、実は病いによって「私」の慣れ親しんだ日常が破壊された結果、その原因として後から浮上させられたものなのであり、そのとき、「えたいの知れない不吉な塊」という、「檸檬」の物語の根幹をなす壮大な幻想は、病いが幻想化されたものなのだということを見出すことが出来た。

さらに「私」は、病いによって変容してしまった自己の慣れ親しんだ風景を取り戻し、「空洞との距離を埋める」ために、主体的で自覚的な「錯覚」、「想像」という幻想を遂行していたのである。

その中でも特に重要な「丸善の中に檸檬を据え付ける」という主体的な幻想の経験によって、「私」は病いの幻想化された「えたいの知れない不吉な塊」を爆破し、「自分にこそふさわしい生を回復」するのである。

※本研究では、『梶井基次郎全集 第一卷』（筑摩書房、一九九九年）に収録された「檸檬」をテキストに用いた。

第二章 堀辰雄「死の素描」における「僕」が見た「天使」

第一節 「死の素描」について

第二章でも、第一章と同様に（一）病理学的な概念としての疾病を患った人物が、自らの身体や精神、あるいはそれを通して接する世界を幻想化して語る小説を分析する。本章では、急性肺炎を患って入院している「僕」が、自分自身が患った病いと、病いを患った自分の置かれた状況をロマンティックに語る、堀辰雄の「死の素描」を分析していきたい。

堀辰雄「死の素描」は、『新潮』（一九三〇年五月号）に発表された短編小説である。初刊は『不器用な天使』（改造社、一九三〇年）であり、のちに角川書店版『堀辰雄小品集別冊・薔薇』（一九五一年六月）に加筆訂正の上収録された。その後もたびたび再録されてきている。

作品の梗概は以下の通りである。「僕」は入院しており、受け持ちの「天使」は、白い看護婦の制服をつけている。「僕」は恋人にこっそり手紙を書いていた。恋人と「僕」は、どちらが相手をより苦しませることができるか「苦しめっこ」を続けていた仲だったが、彼女との最後の夜、「僕」は倒れて入院した。彼女のことを思いつめていた故の痛みは、医者の方によると急性肺炎の前兆だったらしい。医者がいつも助手にした「天使」は、過失ばかりしていた。「天使」が皮下注射と静脈注射とを混同するたび「僕」は脳貧血を起こし、意識界から無意識界へ突き落とされた。これは死の素描デッサンではないのか？「僕」は「天使」のことを死の間諜なのではないかと考えるようになった。ある夜、半睡状態を続けていた「僕」は、電話に応じ、エレベーターのボタンを押すように頼まれている「天使」の声を聞く。その時「僕」は急に全身がしびれ出し、死を覚悟した。エレベーターに向かった「天使」は、「僕」には UP のボタンを押すべきと思えるところ、DOWN のボタンを押してしまった。このようにして、「僕」は天使の不注意により死の危機から脱したのである。「僕」は、手術で取り除く肋骨でイヴを作ってくれないかなア、と「天使」に向かって言った。

作者の堀辰雄（一九四〇～一九五三）は、モダニズム文学の代表的作家として認められた作家である。池内輝雄は、堀辰雄について「昭和初期のモダニズム文学隆盛のさ中に、透徹した知性と清新な抒情性の溢れる作品をもって登場」し、「生、死、愛の主題を深めた諸作で昭和文学史上に大きな足跡を残した」作家であると述べている²³³。モダニズム文学は、一九二八（昭和三）年前後から六、七年にかけて全盛期を迎えたプロレタリア文学運動に対

し、これに反旗を翻した新興芸術派による文学であり、彼らがアパートやダンサー、「死の素描」にも登場するようなカフェの女給などのモダンな風俗を描いたことからモダニズムと呼ばれた²⁴。

「死の素描」は堀の初期の作品である。作中の「僕」は急性肺炎で入院しているが、堀自身についても周知のとおり肺結核を患っていた。彼は生涯の宿痾となる結核を高校時代から病み、闘病生活を送った末に亡くなった。「死の素描」発表の一九三〇（昭和五）年、二十六歳の時点でも、同年十一月に発表された「聖家族」脱稿後にひどい咯血をしている²⁵。よって堀の人や作品が論じられるときには、彼の病いや死へのまなざしを見逃すことは出来ない。「死の素描」についても、千葉俊二は、「生と死の幻想的なあわいを、フランス文学の影響による洒落た、軽快な筆致で詩情豊かに描き出している」と評している²⁶。

さて、千葉の指摘に「幻想的」とあるが、「死の素描」における「僕」の語りが幻想的でロマン的な印象を与える大きな要因の一つとして、「天使」の登場があると考えられる。「天使」は「僕」を受け持つ看護師の隠喩であるが、テキスト冒頭から登場し、その後も一貫して重要な役割を持ち続ける。千葉はそのような「幻想的なあわい」を、堀が「フランス文学の影響のもと描き出していると述べている。作家としての出発期の堀はフランスの詩人、ジャン・コクトーの著作の翻訳を精力的に試みている。「天使」はコクトーの著作中に頻出する語彙で、その影響下に堀も多用している²⁷。したがって、堀辰雄の作品に関する先行研究においても、コクトーの影響が取り上げられることは少なくない。「天使」という語彙も考慮しながら、「死の素描」に関連する先行研究を整理しておく。

日高昭二は、堀辰雄におけるコクトーの影響を踏まえたうえで、堀辰雄作品のテキストに描かれた風景にいる「天使」の存在について、「堀辰雄の天使は、多くの場合「死」また「病」と「生」を両義的に媒介する者の隠喩として表されている」とし、さらに堀のテキストの「天使」は、そうした死と生の隠喩にはとどまらず彼のテキストにおける人間関係の原理的な変換までも導いているとし、次のように指摘している。

こうして「天使」の意識は、堀辰雄のテキストにあつて、人間と人間の関係、人間と風景の関係を「現実以上」のものに変容させている。そこでは、スロオプや屋根の勾配などが、彼と彼女の距離感を巧みに映し出しているが、むしろそれらの距離感には目に見える物体が示しているものである。人間にとつての空間とは、物体と物体の距離感によつて感知されることと言つてもないが、しかし人間と人間がつくり出す距離感とは、物体の距離感を越えたところで「あたかもそれを始めて見るかのやう」な風景へと変容す

る。それは、都市であれ田園であれ変わらない。都市の迷路、丘のつらなりなどの一見現実的な風景も、彼の「内部」と交通する表象として織り成されているのである。²⁸

日高は、堀辰雄のテクストにおける「天使」の意識を、「人間と人間の関係、人間と風景の関係を「現実以上」のものに変容」させ、堀の「内部」と交通する表象と捉えている点で、「天使」が特別な役割を持っていることが分る。

グルジンダー・サツグは、堀がヨーロッパの文学や文化との関わりで、どのように自分の錯覚の技法を展開してきたかを明らかにする中で、堀辰雄作品における「天使」について、次のように述べている。

現実の世界と幻想の世界を媒介するものとしての「天使」が書かれている。またこの媒介する「天使」を通じて、堀は自分の作品の中で幻想の世界と現実の世界へと行ったり来たりする。²⁹

天使を「幻想」と「現実」の媒介者とするこの指摘は、「死の素描」でもまさにはっきりと見出される「天使」の役割である。

また、渡部麻実は、従来の堀辰雄研究がコクトーの影響を盛んに取り上げつつも、科学で芸術をするコクトーの実験の側面への配慮を欠いていることを指摘したうえで、コクトーが、死者の世界と生者の世界の仲介者たるガラス屋、天使ウルトビーズに出会ったのが、ほかならぬエレベーターであったことを踏まえ、次のように述べている。

病による〈不動の速度〉の獲得によって、天使たち一行を乗せて上昇するエレベーターをはっきりと見出す『死の素描』が、科学による不可視の可視化を試みるコクトーの実験をこそ取り入れていることは明らかだろう。(略)／天使をエレベーターに乗せて上昇させた『死の素描』が、天使の飛翔を神力によってではなく、科学と機械によって実現させていることに、われわれはもつと注意を傾けるべきだ。³⁰

渡部は、「天使」の飛翔という不思議な出来事を、科学が実現させているという視点を提示している。

以上のように、「死の素描」、加えて堀辰雄作品における「天使」の役割にも注目しながら先行研究を概観してきた。先行研究の「天使」に対する見方はいずれも、詩的な表現に溢れている「死の素描」を解釈する際に説得力のある見方である。しかしながら、コクトーの影響下にある「天使」という言葉に着目するために、どうしても「天使↓僕」という方向のはたらかかけを明らかにすることに比重が置かれるきらいがある。

「死の素描」の「僕」は病いを患い、その自分の置かれた状況や、自分の患った病いにつ

いて幻想的に語る。本研究における、このような病いを患った語り手による幻想的語り注目するならば、「天使」を語る「僕」、つまりテキストにおける急性肺炎を患った「僕」の側にこそ、「天使」を「天使」たらしめている要因があるのではないだろうか。

よって本稿では、堀辰雄の短編小説「死の素描」について、「天使」をヒントにしながら、病いを患った「僕」が、自分が患った病いなしは病いを患った自分の置かれた状況をどのように幻想的に語っていかの分析していきたい。そしてそのように病いを幻想的に語っていくことは「僕」にとって一体どのような意味があるのかを見出していきたい。

第二節 「僕」が見る「天使」——「現実の世界」と「幻想の世界」——

語り手の「僕」は肺炎で入院しており、作中何度か、病いの症状や夢などによって意識が朦朧とする状態に陥る。先に引用したグルジンダー・サツグの言葉を借りて、この病いの症状や夢で意識が朦朧とする状態の中にいる時の「僕」が見ている世界を「幻想の世界」とし、それ以外の状態の時の「僕」が見ている世界を「現実の世界」とする。すると、「僕」は作中何度も「現実の世界」と「幻想の世界」を行き来していることになる。では、それぞれの世界にいるときの「僕」は、「天使」をどのように語っているのだろうか。

まず、「現実の世界」にいるときの「僕」が見ている「天使」に注目する。「現実の世界」にいるときの「僕」によって語られる「天使」の様子をまとめると、

(ア) 病室にて「僕」のベッドのかたわらにいて、「僕」からの「蓄音機をかけてくれませんか？」との問いかけに応じて蓄音機をかける。(77頁)

(イ) 「僕」が禁じられていたはずの手紙を書いているのを見つけた。さらに、「それなら、それを私に読んで下さい」と「僕」に頼み、手紙の受取人に興味をもつ。(78頁)

(ウ) 肋骨を取除く手術を受けることになった「僕」のベッドのかたわらにいて、「その代り、その骨で、僕にイヴを作つてくれないかなア……」と語り掛けられる。

(84頁)

「天使」という言葉は頻出するものの、テキスト内において「天使」と「僕」との間で実際に直接生じたやり取りについて語られるのは、このくらいである。これらを除く部分では、「僕」が自分の見ている「天使」を一方的に語っているばかりである。つまり、「僕」は「天使」のことを自分を死へと誘う「死の間諜」として認識し語っているわけだが、テキストで語られている「僕」と「天使」の「現実の世界」での実際のなやりとりは殆ど無いのである。

このように考えると、「死の間諜」としての「天使」は、「僕」の側から看護師に対して「死の間諜」としてのイメージが積極的に与えられることによって、語り出された像であるということが指摘できる。

では、「幻想の世界」にいるときの「僕」が見て語る「天使」はどうか。これについても、順にまとめる。

(エ)「僕」の病室にて、「僕の夢をよく見抜いてみて、それを調節する」。(77頁)

(オ) 医者が「僕」に注射をするときにいつも助手として現れる。皮下注射と静脈注射を混同する過失を犯し、それによって起こる脳貧血は「僕」を「エレヴェタアで急速に、意識界から無意識界へ、突き落とす」。(81頁)

(カ)「僕」の発作中に「僕の口の中へ無理に赤インクを注ぎ込まうと」する。それによって「僕」は「ずんずん無意識の中へ落ちて行った」。(82頁)

(キ) 注射で過失を繰り返す、「僕」に脳貧血を起させる。それに対して「僕」は「これは死の素描ではないのか?」、「一本一本針を刺されながら、いつのまにか僕の腕に、死の頭文字の見事な入れ墨が、完成されつつあるのではないのか?」と考える。(82頁)

右の引用はそれぞれ、(エ)がテキスト冒頭で「僕」が眠ってしまい夢の中にいるとき、残りの(オ)、(カ)、(キ)が静脈注射と皮下注射を混同され脳貧血で意識が遠のいているときの語りである。また後述するように、「僕」が半睡状態を続ける中、エレベーターを見ながら臨死体験をする場面(82頁15行目～84頁9行目)についても「僕」は「幻想の世界」にいるが、このときにも「天使」に関する語りが複数見られる。これについては次節で詳しく触れることとする。

右の(エ)～(キ)から分かるように、「幻想の世界」にいる時の「僕」は、現実の出来事をそのまま語らない。具体的には、(エ)では看護師による蓄音機の調節に対して「僕の夢をよく見抜いてみて、それを調節する」、(オ)では注射の失敗で意識を失わせることを「エレヴェタアで急速に、意識界から無意識界へ、突き落とす」、(カ)では口に注ぎ込まれる薬品を「赤インク」、(キ)では注射に対して「死の素描」、などと認識して語っている。すなわち、「僕」は、実際に見ているはずのものに何らかの別の意味を与えたり、何らかの別のものに変換したりして語っているのである。このように「僕」は、「幻想の世界」にいるときに、自分の置かれた状況に様々な現実と異なる意味を与え、幻想的に語っているのである。

以上のように、「現実の世界」と「幻想の世界」における「僕」が見る「天使」を比較す

ると、入院中の「僕」を受け持っている看護師が、「幻想の世界」にいるときの「僕」によって認識し語られることによって「死の間諜」としての特徴を持たされ、「天使」として語られていることが分かる。

「幻想の世界」にいるときは、病いの症状や夢などで意識が朦朧とした状況の中にいるときであった。「死の素描」のテキストでは「幻想の世界」にいるときの「僕」がテキストの多くの部分を語っているが、そのときの「僕」は、他者から見れば眠っていたり気を失っていたりしているのであり、コミュニケーションをとれない状態なのである。だが逆に考えれば、このように外界と遮断されているからこそ、「僕」は病いを幻想的に語ることを妨げられることなく、より一層自由に語ることが保障されている、とも考えられる。

第三節 「僕」が見る「天使」——臨死体験——

前節でも触れた「或る夜」のエレベーターを見ながら臨死体験をする場面(82頁15行目～84頁9行目)は、この作品の山場となっている。「僕」は半睡状態を続けており、「モオタアの音らしい狂暴な爆音が聞え出す」(83頁)と同時に、「僕は、まるで電気をかけられたやうに、急に全身がしびれ出す」(83頁)と語られることから「僕」の容態が急変したことが想定できる。加えて、「死ぬのはこんなものなのかしら……こんなことなら、なんでもないやア……」(83頁)と感じた後、最終的に「そして僕は危ふく死から救はれた」(84頁)と語っていることから、命は助かったものの容態の急変によって「僕」が少なからず死を覚悟したことが分かる。

先の引用の渡部の論考が、科学と機械の劇的な発達により芸術の革命が要求された時代における、芸術と科学を化合しようと試みたコクトーの挑戦への堀のまなざしを視座として「死の素描」を考察していたように、作中においてエレベーターは重要な役割を担っている。このエレベーターについて簡単に確認しておく、日本では一八九〇年に初の電動式エレベーターが設置され、一九三三年には、当時のモダニズム最前線として、高級感のあるエレベーターが設置されていた³¹⁾。「死の素描」の発表が一九三〇年であることを踏まえると、この作品がモダニズム最前線としてのエレベーターを山場に取り入れていたことが分かると同時に、当時の読者もそのようなイメージを抱きながらこの場面を捉えていたことが予想できる。

さて、このエレベーターを見ながらの臨死体験の場面では、「電話が切られる」(83頁)、「まるで電気をかけられたやうに、急に全身がしびれ出す」(83頁)、「それから彼女はボ

タンを押さうとする。」(83頁) というように、他の場面と比較して連続的に現在形を多用して語られており、読者に臨場感や緊張感を与え、この臨死体験の場面を特異な場面として浮かび上がらせている。

この場面は、「僕」が聴覚によって受け取った情報を語ることから始まり、その後も聴覚による情報と視覚による情報が織り交ぜられて語られる。よってここでは、エレベーターを見ながらの臨死体験の場面について、「僕」が聴覚をもとに語る情報と視覚をもとに語る情報に分類して考察してみたい。

まず、「僕」が聴覚をもとに語る情報について見て行く。

(ク) 僕は隣りの部屋にけたたましい電話のベルの鳴るのを聞いた。それが止んだ。
(82頁)

(ケ) ……私でございます(中略) 出来て居ります。(83頁)

(コ) 隣室から、あちらこちら歩き廻つてゐるらしい足音が聞えてくる。(83頁)

(サ) 突然、モオタアの音らしい狂暴な爆音が聞え出す。(83頁)

(シ) 時計が二時を打つ。(83頁)

これらの部分に注目すると、「僕」が聴覚を元にして語る情報は、実際に起こったことを比較的そのまま語り出していることが分かる。つまり「僕」は、現実を語っているのである。

一方で、「僕」が視覚をもとに語る情報についても確認していこう。

(ス) 赤い木綿の布でほとんど掩はれた電燈が、部屋中を、悪夢の中のやうに凄惨な光りで照らし出してゐた。(82頁)

(セ) 天使は、僕の部屋にはひり、まごまごし、それからドアを半分開けたまま、廊下に出て行き、そしてエレヴェタアのところまで達する。(略) 彼女はUPの方を押すべきではないのか？(83頁)。

(ソ) 果して、死とその助手等の乗つてゐるエレヴェタアの檻は、僕等の前を素通りして、ずんずん上方に昇つて行つてしまった。(84頁)

このように、「僕」が視覚をもとに語る情報に注目すると、まさに「死の間諜」としてのイメージをもって「天使」の像を語り構築していることが分かる。つまり「僕」が語っていることは、非現実なのである。

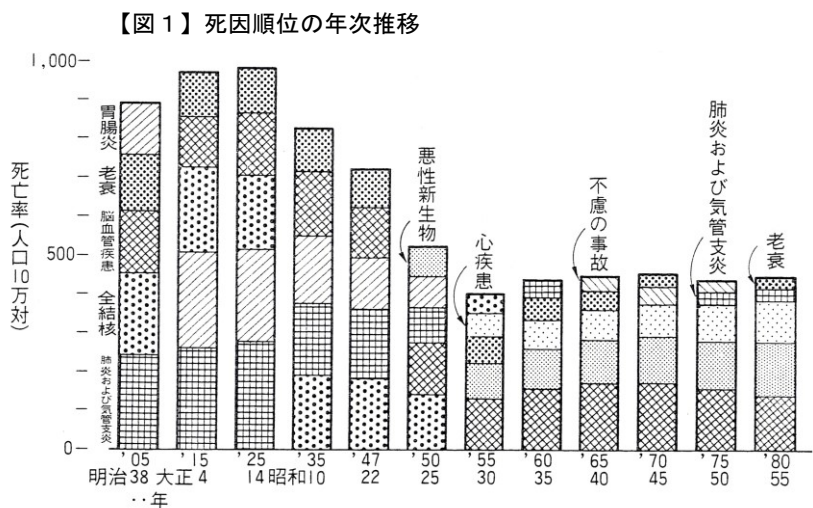
以上見てきたように、「僕」は、聴覚をもとに語る情報は、実際に起こった事実を簡潔に語っているのに対して、視覚をもとに語る情報は、看護師に「死の間諜」とする意味付けを与えた「天使」の像を語り描いていることが分かる。つまり、視覚を通して認識した物事に

対して、「僕」は病いの幻想を語っているのである。

第四節 看護師を「天使」と語る「僕」

では、なぜ「僕」は、現実には看護師であり、極めて単純に言ってしまうえば入院中の「僕」を受け持って看護を行っているだけの人間を「天使」と見る必要があったのか。

それは、肺炎という重い病気にかかり、死に直面した「僕」が、死ぬことを幻想化することでそれと向き合おうとしているからではないのか、という仮説を立ててみたい。



資料 厚生省「人口動態統計」

「僕」が患った肺炎は、同時代においては死につながる重い病気であったことが分かる。さらに、当時の読者の間でも、肺炎が死につながり得る重い病気であるという認識が少なからず共有されていたのではないかということも推測できる。

ここで宮坂康一が、初期堀辰雄作品における「死」の導入について、次のように指摘していることに注目してみたい。

「死」の導入によって、堀には新たな創作の道が開ける。一つは、作者の実感を「素ぼく」な告白ではない形で描く小説の実現。これは「死」が堀にもたらしたのであろう切

実な実感を実生活から切り離れた形で表現するという形で試みられる。もう一つは、コクトオが定義する詩人のあり方に近づくこと。コクトオ「職業の秘密」によれば、「死」は由来する対象の意外な魅力を見出し、表現することが詩人の仕事であった。³³

さらに宮坂はこれを踏まえて「死の素描」に言及し、生と「死」の表裏一体さや生と「死」の近接性が見られることから、「こうした「死」の捉え方には、常に「死」の傍にあつた堀の暗い想念が反映しているとみられる。堀はこの想念を、非現実的な世界を背景に、それとなく、ただし印象的に表現する方法を選んだのだろう」と述べている。宮坂による指摘はあくまで作家としての堀の死の捉え方について述べているのであるが、その死の捉え方は「僕」の語りにどのように反映されているのであろうか。

死について具体的に「僕」はどのように語っているか確認してみよう。例えば、恋人に宛てたという手紙の中で、「しかし、死んでゐることと、生きてゐることとは、一体どう違ふんでせう？これからも僕は、何時でも行きたい時には、あなたのところへ行くことが出来ません。」(78頁)などと書いたり、「或る詩人」(コクトー)の言葉を引用しながら死について語ったりする。先に取り上げたエレベーター前での臨死体験の場面でも、「僕はすこしも抵抗しない。なされるがままになつて」(83頁)おり、「死ぬのはこんなものなのかしら……こんなことなら、なんでもないやア……」(83頁)と感じている。このとき、「僕」は死に直面した恐怖を語っているというよりも、ある程度それに身を任せているというようにも読み取れる。

以上のことから、重病を患った「僕」は、病いとそこから派生する死に直面した状況において、自分の置かれた世界を幻想化して認識し語ることによって、病いと死を受け入れるという方法をとっているのではないだろうか。

では、「僕」による病いの幻想的な語りが、最後まで、病いに押しつぶされなかったための無意識的な自衛手段であったのかと言えればそれも決して違うだろう。それは、テキストの最初と最後で「僕」が語る一文から分かる。

(夕) 僕は、ベッドのかたはらの天使に向つて云つた。(77頁) ……最初の一文

(チ) 僕はベッドのかたはらの天使に向つて云つた。(84頁) ……最後の一文

(夕)はテキストの冒頭、(チ)はテキストの最後に語られる。「僕」は最初と最後で、句読点を交えて同じことを語り直している。しかし、(夕)と(チ)では、これを語る「僕」の状況として、「死の危機から脱することが出来た」(84頁)かどうかという大きな違いがある。(夕)の「僕」は、既に見てきたように当時重病とされていた肺炎で入院し、死と隣り

合わせの状況である。しかし「死の危機から脱することが出来た後も、(チ)のように「僕」は幻想的語りを止めることはない。つまり「僕」が病いを幻想的に語ることは無意識なものではなく、病いの幻想における現実との意味の差異を積極的に語ることで自ら病いの悲惨なイメージを巧みに転倒させ、病いを受け入れ向き合っていくことに繋がっているのである。もちろん、(タ)で「天使」に「その代り、その骨で、僕にイヴを作つてくれないかなア……」(84頁)と語るのには「狂暴な手術に堪へるよりしかたがない」(84頁)からなのだが、一方で「僕」はその手術を受けるのを「よりよく生きるため」(84頁)だと語っている。

このように、まず、「僕」が自らの病いないしは病いを患った状況を幻想的に語ることは、死に至る病いを患った「僕」にとって、それを受け入れたり、さらにそれに向き合って乗り越えていく上で大きな力となっている。さらに「僕」は、病いの幻想における現実との意味の差異を積極的に語り、病いの苦しいイメージを自ら転倒させている。「僕」が病いの幻想化を巧みに操り、自分の語る物語世界を楽し気に語り出していくことは、病いを受け入れることにはじまり、病いに向き合い、さらには「死の危機から脱」し、「よりよく生きるため」の積極的な手段とまでなつて、「僕」の大きな力となっているのである。

第五節 本章のまとめ

本章では、堀辰雄の短編小説「死の素描」について、そのテキストの幻想的な印象を作り出す一要因でもある「天使」という語彙を軸として、「僕」が自分の病いないし病いを患った自分が置かれた状況をどのように幻想化して語っていくのか、またそのように語る意義を分析して来た。

そもそも「天使」は初期の堀辰雄が影響を受けていたジャン・コクトーが多用していたもので、先行研究では、そのコクトー受容を踏まえて「天使」の役割を明らかにすることで導き出される「天使↓僕」のはたらきかけが明らかにされてきた傾向がある。本研究では、病いを患った語り手による幻想的語りの視点から、むしろ「天使」を「天使」たらしめている要因は病いを患った「僕」の語りの側にあるとして、そのはたらきかけを分析できた。そして、「僕」は病いの症状や夢によって意識が朦朧とする状況にいるときに、看護師を「天使」として認識し語ること、また病いの幻想は「僕」の視覚を元にした情報によって語られることが明らかにできた。このように、「天使」は「僕」が受け持ちの看護師に「死の間諜」としての意味をもたせて語ることで作り出された像なのである。

テキスト全体を通して、語り手の「僕」は、「天使」のきまぐれで自分の命が左右されているかのように、病いに侵された自分の状況を幻想的に語る。だが、幻想的な表現を取り払えば、テキストで語られることは全て現実的な出来事だ。「天使」という表現を通してテキスト全体が幻想的に語られているのは、当時死に至る病いとされていた肺炎を患っていた「僕」が、病いと死を幻想化することでそれを受け入れようとしているからだと考えられる。

しかし、それは「死の素描」の「僕」が、一元的に病いの幻想に縛られている被害者である、ということの意味しているのではない。病いを幻想的に語ることは、まず「僕」が、病いへの悲惨なイメージを巧みに転倒させ緩和することを可能にしているのであり、それは「僕」が病いを受け入れ向き合っていく原動力になっているのである。

※本研究では、『堀辰雄全集第一巻』（筑摩書房、一九七七年）に収録された「死の素描」をテキストに用いた。

第三章 伊藤整「病歴」における病いと健康

第一節 「病歴」について

前章までは、(一) 病理学的概念としての疾病を患った人物が、自らの身体や精神、あるいはそれを通して接する世界を幻想化して語る二作品を分析して来た。第三章からは視点を換え、(二) 自分が患った病いそのものに対するイメージを幻想化して語る作品を取り上げたい。本章では、伊藤整の「病歴」という作品を取り扱う。

伊藤整「病歴」は、『新潮』一九四三年二月号に発表され、『伊藤整全集』第二巻(新潮社、一九七三年)に収録された短編小説である。

小説の梗概は以下の通りである。「私」は四年ほど前の夏、友人の秋山と北海道を旅行中、背中の腫れがカリエスなのではないかという疑念を抱いた。だが、自分の時間がなく、旅行日程も拒めず、病院に行けなかった。やっと「私」が札幌で病院に行くと、医師は何でもない顔で腫れを切って処置を終えた。未だ不安の拭えなかった「私」は、今度は東京の結核療養所の徳山医師にもう一度診てもらい、血液検査をして健康だと証明してもらったことでやっと安心できた。それから三年後の去年の夏、「私」は、何かぼんやりした影が視線と一緒に動くのが見えるようになり、失明するのではないかと考える。治療に取りかかる前に仕事を纏めなければならぬ気持ちから、医者に行かずにはいられない。しかし気になっていよいよ医者へ行くと、意外にも生理的なものだとわれ、本当にそうなのかという不安と自分では認めたくない安堵の気持ちを抱いた。カリエスの時と同様、かえって積極的に診断を求めると、持ちが強まった「私」は、著名な工藤医師に診断を求めると、そのままにしておいても差支えない病気だと診断される。カリエスも失明も免れ、自分には本当の怖ろしい病気はやって来ないと信ずるようになったとき、今度は肺を侵された疑いを抱いた「私」がレントゲン写真を撮ってもらうと、右肺下部に二つの浸潤の陰翳が現れて来た。

作者の伊藤整(一九〇五〜一九六九)は、新心理主義文学の作家として注目され、創作・理論の両面にわたって活躍した作家である。前章までで考察してきた梶井基次郎や堀辰雄、そしてのちに取り扱う吉行淳之介と比較すると、伊藤整自身の病いと彼の作品との関係性について大きく取り上げられることは少ない。しかし、「病歴」発表前年の一九四二年二月、肺を侵された作中の「私」と同様に伊藤整も結核初期の疑いで一か月ほど病臥している³⁴。

「病歴」について、亀井秀雄は次のように述べている。

いわば青年期特有の自己中心主義が他人への無理解と自分に関する誤解しか生み出さ

ないということの反省の上に立って、伊藤整の昭和十年代の仕事は開始されていた。この反省から、「祝福」「得能五郎とスキイ」「代理群長」「富田君の話」など、自分とおなじこの現実には生きている人たちへの生き生きとして楽しそうな観察や有情をたたえた理解があらわれ、更に、柔軟な他人理解の自信が「父の記憶」「父の像」などの試みを生み、また余裕ある自己理解の「四畳」「病曆」などの短篇を生んだのであった。「息吹き」「満人の学校」「駅で」「温泉療養所」など、半ば時代から関心を強いられた作品においても、かれはよく見、よく理解する自分の姿勢を失ってはいなかった。一体にこの時期の伊藤整は、現実のいさかきの現場から一定の距離を保ち、「この二階から見ているやろう、と私は、傍観者の立場に自分を押さえつけたのであった」という態度を崩さず、そこが物足りない点だと言え言えるのであるが、時代全体があのだニッカアボッカアの男のように抽象の觀念にそそのかされて走り出してしまっているとき、むしろかれは、とかく無視されがちな日常的に生きている人たちのかけがえのない真実を拾い出しつつ自分の発想を新しくしてゆく方向を選んでいたのである。³⁵

亀井は「病歴」執筆当時の伊藤整が、「現実のいさかきの現場から一定の距離を保」つていたこと指摘し、その結果、「病歴」が「余裕ある自己理解」から生まれたと述べている。この亀井による指摘を踏まえると、仮に伊藤整自身の現実の経験の一部が「病歴」という作品の土台になっていたとしても、伊藤はその自己の経験を、かなり意識的に距離を置いて見つめたうえで、作品に昇華していたと考えることができる。

さて、亀井によるこの指摘を除くと、過去に短編小説「病歴」を論じた先行研究は、管見に入る限りでは見つけることができなかった。一方で、「病歴」に関するいくつかの同時代評を確認することができたので、それらを見ておきたい。

まず、鎌原正巳は、「病歴」について次のように評価している。

主人公が最初はカリエスの疑ひを自分に感じ、次に失明のおそれにおののいたのであるが、結局何でもなくすんでしまふ。ところがそれから三ヶ月ほどして肺を侵されてゐることがはつきりする過程を描いたものである。／かう書いてしまへば簡単な話になるが、実は病気の疑を抱いてから、それが何でもないことが分るまでの過程の中に、今日に生きる智識人の姿態の陰翳が浮び上つてくるのである。(略) しかもどうにもならない今日の現実なのだ。眼を覆ふわけにはゆかないのだ「時世々々の人情世態を写すを骨髄とする」小説の本来の姿なのである。³⁶

鎌原は、「私」が病いかどうかという疑念に苛まれる過程に、「今日に生きる智識人の姿態の

陰翳」が「今日の現実」として浮び上がってくる、として「病歴」を好意的に評価している。

一方で、森山啓は、「病歴」を次のように評価している。

伊藤整氏の「病歴」（新潮）に書かれた、病気の診断を伸ばす心理は、私などにも覚えのあつたことだから、精妙に書いてゐると思つたが、さてそこに作者の幽かな嘆きと笑ひを感じるほかは、書かずをれなかつたといふほどの意味は感じられない。³⁷

森山は、「作者の幽かな嘆きと笑ひを感じる」けれども「書かずにをれなかつた」という意味が感じられないとし、前記の鎌原とは反対に、「病歴」を批判的に評価している。また、徳田戯二も「病歴」を次のように批判的に評価している。

題名の通り（作者？）^マ病歴が繰展げられてゐる。神経質な性質を抉つた作品で新潮三篇の中では読ごたへの有る（前半）作品であるが、後半近視の硝子体混濁の自己納得への神経的過程は一応肯けはするが、現実決戦下の状況の中で何か空々しい馬鹿々々しさを感ずる作品である。（略）「聯の空しさを感じさせる作品など既に時代的に過去の作品である。／新文化育成への国家要請として国家が文化統一を期してゐる新芸術要項の中には、文化統一のためには一切の個人主義の所産を排して歪曲された様相を健全な形に革めなければならぬ、とされてゐる観点から、個人的偏奇に墮した作品は既に時代の要求として取除かれ過去に繰入れられてゐるわけである。³⁸

徳田は、「病歴」を前半は読みごたえがあるとしながらも、太平洋戦争真っ只中の時局下において「何か空々しい馬鹿々々しさを感ずる作品」などと批判している。

このように「病歴」の同時代における評価は割れている。しかし、鎌原が「今日に生きる知識人の姿態の陰翳」、「今日の現実」が浮び上がる、森山が「病気の診断を伸ばす心理」が「精妙に書いてゐる」、そして徳田が妥協的ながらも「自己納得への神経的過程は一応肯けはする」としていることから、「病歴」のテキストには、人間が病いかどうかの疑念に苛まれる過程の心理が細緻に分析され描写されているという点においては、三者の意見は共通していると言える。これは、亀井の指摘にあった、「病歴」が伊藤整の「余裕のある自己理解」を背景として生まれた作品で、伊藤整が、「現実のいさかいの現場から一定の距離を保」つて「日常的に生きている人たちのかけがえない真実を拾い出し」ていたという評価とも繋がっているとと言える。

先行論における右記のような評価は、「病歴」の物語内容つまり「私」の語る極めて個人的な経験を、普遍的な視点で捉え直しているという点で重要な指摘である。つまり、「私」の揺れ動く心理から、例えば亀井や鎌原は「日常的に生きている人たちのかけがえない真

実」や「今日の現実」を見出しているのである。

では、「病歴」のテキストが、本当に「真実」や「現実」を浮かび上がらせているのだとすれば、その「真実」や「現実」とは、具体的に何を指しているのだろうか。

先に、先行論が「私」の語りから普遍性を見出したことの重要性を指摘した。しかしながら、本研究の立場から言えば、もう一点見逃してはならない問題がある。それは「私」が病歴を語っているということの意味である。次のフランク・ゴンザレス・クルツシによる指摘を見てみよう。

伝統的に、診断の過程は医者と病人が顔を合わせるところから始まる。後者(略)は、自分の症状の性質や経過を説明する。このときの内容が、患者から申告された病歴である。これに医療従事者が患者を視診して得た情報を加え、その全体を分析して解釈すると、「正式の」あるいは「本物の」病歴となる。³⁹

クルツシの指摘を踏まえれば、そもそも病人が語る病歴とは極めて個人的な性質を持ったものであるということが分かる。「病歴」の病いは、「私」の心を弄ぶもののように語られており、最後まで「私」の心を読んだかのように症状が現れる点でとても奇妙に語られている。

「病歴」で語られているのは「私」自身の病歴なのであり、当然そこにも固有性が存在はずなのだ。つまり、「病歴」のテキストから「真実」や「現実」といった普遍性を読み取る際には、まず「私」の病歴の固有性を明らかにしておく必要がある。

よって本稿では、伊藤整「病歴」において、「私」が語る病歴の固有性を明らかにすることで、「病歴」のテキストに表れる「真実」や「現実」とは何なのか、そしてそうした「真実」や「現実」に「私」の語りはどのように作用し、何故それを語るのかということをは明らかにしていきたい。

第二節 「私」が語る病歴

まず、「私」の語りの性質や構造がどのようなものなのか確認しておきたい。

「私」が語っている時点は「すると右肺下部に二つの浸潤の陰翳がありありと現われて来た」(526頁)以降のどこかの時点であり、「私」は過去の出来事について回想して語っている。もう少し細かく整理すると、過去の出来事の語りについては、語りの現在から見て「四年ほど前の夏」(514頁)の出来事(カリエスを患った疑念)を起点として語りはじめられ、次に「それから三年ほどして、去年の夏のこと」(519頁)の出来事(失明に至る病いを患った疑念)を語り、最後に「それから三月ほど経って」(526頁)からの出来事(肺を侵さ

れた疑念)を語る。

「病歴」のテキストでは、「私」が病いかどうかという疑念に苛まれる過程が、その間の自分の生活、体調の変遷など詳細に語られる。特に同時代評にもあるように、その間の「私」の心理の動きについては、順を追って漏れなく語られるのみならず、「私」自身が「私」の心理の揺れについて分析して語ることさえある。最早読者が「私」の内面を想像する余地など無いほど、夥しい情報量で緻密に語られているのである。例えば、次の段落を見てみよう。

そう思うと朝毎に私は背中の圧迫感の増していくのを感じ、どうしても起きる気になれないのだ。この、絶対に、今すぐしなければならぬことを、何故しないで、自分にも他人にもその場を繕っているか、という反省が心を離れない。また別な哀れな逃避的な気持では、どうせカリエスになったのなら、同じことだ、こんなに膿んで今さら元に戻るものか、勝手にしやがれ、とも思う。かと思うと、しかしこうして熱っぽくもなく、トランクと手下げ鞆を持ったり、バスで何時間も揺られたりして平気なのは、一体どうしたのだ。何でも無いかも知れないじゃないか。そう思って、私は試すように、ことさら重い荷物を持って歩いて見たりした。(517頁)

ここでは、「私」はまず「背中の圧迫感の増していくのを感じ」、「しかしこうして熱っぽくもなく」などと自分の身体の状態を語る。さらにそれに伴う心理については、しなければならぬことから目を逸らしてその場を取り繕う反省と、そのまま病気になるってしまえという投げやりに納得しようとする気持ち、更にそれでもまだ重い病いでないことを期待している気持ち、という風に、極めて慎重に自分を顧みないと言語化することが困難な心理を、緻密に語っている。

しかしながら、この緻密であるという「私」の語りの特徴は、テキストの最終段落で即座に逆転することになる。最終段落を引用する。

だが、それから三月ほど経って、私は肺を侵された疑を抱き、徳山医師にレントゲン写真をとってもらった。すると右肺下部に二つの浸潤の陰翳がありありと現れて来た。

(526頁)

ナラトロン

物語論の観点からこの最終段落を考えると、「私」は、それまでの最終段落以前には緻密で詳細な語りを遂行して来たのとは対照的に、最低限の情報量で出来事や心理を語っていることが分かる。最終段落以前の語りでは、物語内容の持続(経験した出来事の量)に対する物語言説(出来事の語りに費やす時間)の持続が長いのに対し、最終段落では、物語内容に対して極端に物語言説の持続が短い。

つまり、「私」が最終段落以前と同じ緻密さで語り進めていくならば、おそらく漏れなく語っていたであろう、「肺を侵された疑を抱」くに至った自分の身体の状態、また「徳山医師」の診断を受けるまでの心理とそれに伴う行動の紆余曲折が、最終段落では要約的に語られる。そして最も特徴的なのは、「二つの浸潤の陰翳がありありと現れて来た」以降の経緯が、完全に省略されることである。このように、テキスト最終段落と最終段落以前の語りは、情報量という点でかなり明確な差をもって語られている、ということが指摘できる。

物語言説（語り方）の面では、最終段落とそれ以前の段落で、以上のようなコントラストが見出せる一方、物語内容の面ではどのような差異が見出されるのであろうか。

結論から言ってしまうえば、そこには「私」の病いが確定する可能性の高さというコントラストが見出せる。最終段落以前で「私」は、病いか否か揺れる心理を詳細に語ってはいるものの、結局「私」に、「私」が想定するような病いが確定することは無い。すなわち最終段落以前の「私」は、語っている現在の時点では既に「病いではない」と確定することが分かっている体調不良の経験を、あたかも重病に至る経験をしたかのように、事実を再編して語っているのである。一方で最終段落では、たとえ要約・省略されていても、「私」の病いが確定する可能性が限りなく高いことを示唆するような内容を語っている。例えば、レントゲン写真という客観的な証拠を早々に持ち出し、さらにカリエスの疑いを抱いたときの「私」が最も信用した医者として登場した「徳山医師」がそこに関わっていることを語る。つまり最終段落では、その後の経緯が語られずとも、おそらく病いが確定したのだと読ませる内容を語っているのである。このように「私」は、最終段落以前には、実際には確定することのなかった病いの経験を語り、最終段落では、最終段落以前と比較すると、確定する可能性が限りなく高い病いの経験を語っているというコントラストが見出せる。

以上見てきた物語言説と物語内容のコントラストを併せて考えると、「私」は、最終段落以前では実際には確定することのなかった病いの経験を詳細に語る一方で、最終段落で語る本当に確定した可能性の高い病いの経験は要約・省略し、殆ど口を噤んでしまうことがある。

以上のように「病歴」のテキストでは、「私」が自らの病歴を語るかと思わせながらも、確定された病いの経験には口を閉ざし、むしろ現実的には病いではないと確定された方の体調不良の経験、すなわち幻想の病いを病歴として語っているのだということが見出せる。

「現実」や「真実」が表れているとされ、緻密に語っていると思われる「私」の語りは、実はずっと実体のない幻想の病いの経験を語っているのであり、その経験を「私」が歴史的

して語るることによって病歴たらしめているのである。

第三節 病いの境界線

「病歴」の「私」は、自分の病いの経験、つまり病歴を語っている。しかし前節で見えたように、「私」の語る病いは、本来は実体のないものである。本節では、「私」がこのような幻想の病いをどのように病歴として語っているのかを分析していきたい。

第一節で見てきたように、「病歴」について、「私」が病いかどうかの疑念に苛まれる過程の心理の描写における「精妙」さが、同時代に評価されていた。ではまず、そのような「私」が揺れ動く内面が「私」自身によって具体的にどのようなように語られているのか、ということについて詳細な分析を試みたい。

「私」の病いかどうかという心理の揺れは、背中が腫れる、視界を影が走るといった身体の不調が可視化されることから始まる。そして、この心理の揺れが終結するのは、「私」の体調不良が病いか否か確定するときである。そしてテキストを詳細に見ていったとき、「私」はこの病いの確定の基準を、医者による診断に求めていることが分かる。テキストの中で「私」が診断について語る箇所を見てみよう。

(ア)そこは、かなり大きな病院ではあるが、何処となく手を抜いた建物といった感じが漂い、それがまた、ここでは致命的な病気という診断など下されないようにも思われるのだ。(518頁)

(イ)かえって積極的な診断を求める気持が強まったのも事実である。(522頁)

(ウ)もうそれだけの診断で十分であった。(523頁)

このように「私」はテキストの中で「診断」という言葉を繰り返し語る。また、直接的に「診断」という言葉を語らずとも、例えば、「只事でないと感じるだけ、私は一層それが決定されるのを怖れていた」(517頁)、「私は病気の決定を一日延ばしに延ばしているだけの事であった」(521頁)、「それが生理的現象だとしても、どういう名のつくものか、あの学生は言ってくれなかった。足の悪い医者も言ってくれなかった」(523頁)なども、医師による診断を前提として語られている箇所だと言えるだろう。

以上のように、「私」は診断を病いの確定基準として強く意識していることが見て取れる。「私」は診断名を与えられることを頻りに求め、そして怖れる。病いか否かに揺れる段階の「私」が怖れているのは、実際の身体の症状よりもむしろ、診断による病いの確定なのである。

以上のようなことから、「私」は、病いを患っている人間と病いを患っていない人間を二分法的に捉え、その二者は医者による診断を基準として明確に切り分けられるものであると認識している、ということが指摘できる。

一方で、診断を受けるまでの間、「私」は自分でこの両者の境界線を引こうとする。そして「私」の引くその境界線は可変的なものである。「私」は自分の不確定な身体を確定していくために、この境界線のどちら側に自分が属しているのか、そして自分を属させるのかと迷いながら何度も境界線を引き直しているのだ。そして、この終わりにく境界線を引き直す行為こそが、「私」の心理の揺れなのである。

では、「私」が自分で境界線を引くという行為によって揺れる様子を具体的に分析していきたい。そのため、境界線で切り分けられた、病いを患っている側と病いを患っていない側の二者各々について、「私」がどのように語っているのかを見ていく。

まず、境界線で分けられた二者のうち、病いを患っている側に関する「私」の語りを分析していく。

次の(エ)～(キ)に注目する。ここで挙げるのは、「私」が、診断によって自分が病いを患った側に属すると確定した後のことを仮に想像して語る箇所である。

(エ) 今後数年間病臥しなければならぬだろう。(略) 背中が変曲して駱駝のようになるかもしれない。(515頁)

(オ) そこで私はレントゲン写真をとられたり、何かの注射をされたりする釧路か網走あたりの病院に入院するとか、秋山に付き添われて寝台車で(そんなものは無いかも知れぬが)札幌あたりまで送り返される。(略) それどころか私のこれからの生活も滅茶苦茶だ。とても、そんな怖ろしいことは、と私は考えて、はっとする。(516頁)

(カ) そして私は生涯起きれない。膿が次々と出、ギブスをはめ、胸がふくれて潰れ、小人が瘤を負うたようになって坐れば、それが最上だ。ああ、と私は眼をつぶる。(517頁)

(キ) いよいよ治療に取りかかったら仕事が出来なくなるだろう。(520頁)

引用した(エ)、(カ)に注目する。(エ)では「背中が変曲して駱駝のようになる」、(カ)では「胸がふくれて潰れ、小人が瘤を負うたように」なる、など、「私」は病いが確定した自分について具体的な身体的変化を想像して語っている。そしてそのとき、視覚的な比喩を用いて差別的イメージが強調して語られていることに注目できる。さらに(オ)、(キ)では

それぞれ「それどころか私のこれからの生活も滅茶苦茶だ」、「仕事が出来なくなるだろう」と語っている。つまり「私」は、病いが確定することによって、日常性が破壊されるということを決めつけているのである。このように「私」は、病いが確定した後の自己を想像して語る際には、それを恐れるあまり、短絡的に差別的な視覚的イメージでもって病気になった自己を表象している。さらに、具体的な経験など無いにも関わらず、病いが確定されたときには、自分の日常性が破壊される、または日常性を保つ資格がないかのように決めつけて語っている。

このような差別的イメージは、病いの確定を先延ばしにする自分への戒めから怖ろしげに語られているのだが、結果として、病気の他者に対して抱く「私」の差別的イメージも露呈していると言わざるを得ない。実際に「私」は、病いが確定した後の自己についてだけではなく、病気の他者について語る時にも、同様の認識のもとに彼らのことを語っている。

例えば、「私」が失明に至る病いか調べてもらうために向かった病院の待合室で、順番待ちをする他の患者たちのことを「その診察室はひどい混雑で、娘に手を引かれた母親とか、眼帯をかけた少年とか、黒い眼鏡をかけた中年の男とか、眼の腐った年寄りとか、一杯に群れていた。それがみなその医師を頼りにする表情で、じっとおとなしく順番を待っている。昔、キリストや釈迦に救ってもらおうと念じて集る病苦の人の群のように、それが見えるのだった」(525頁)と語る。「私」は共に待合室にいる人たちのことを「群れている」などと語る。待合室にいる人々は、実際には各々、様々な症状をもってそこにいるのだが、「私」が彼らを語る際にはその固有性は捨象され、「病苦の人の群」という記号として差別的に語られてしまうのである。

ここで、サンダー・L・ギルマンによる次の指摘に注目してみたい。

しかし、われわれが自分自身の崩壊について抱く恐怖は内面にとどまっていない。むしろわれわれは、この恐れを囲いこみ、そして飼い慣らすためにこそ、恐怖を外界に投射する。いったん恐怖の場所を限定してしまえば、われわれではなく、むしろ一般的な「他者」ということになる。

問題なのは、なんらかの理由によって、〈他者〉の投影を自己定義の少なくとも一側面として受け入れることにあるのであり、われわれの関心もそこにある。4。

ギルマンは、人間は、「自分自身の崩壊」の恐怖を抱いたとき、それを他者に投射することで回避しようとする事、そして一方で、その他者化したはずの恐怖を逆に自分の方に受け入れてしまうことを指摘している。

ギルマンによるこの指摘を踏まえると、「私」も、病いに対する恐怖から、それを他者化する事によって自分を病いを患っていない側に位置付けようとしている、と考えられる。先に指摘した「私」が語る差別的イメージの背景にも、このような病いの他者化があるのではないだろうか。他にも例えば、「私」は「芸術家風な投げやり」(519頁)によって、自分を積極的に病者側に追い込むなど、何度も病いが確定した自己を想定し納得しようとしながらも、このような差別的イメージから結局は病者を他者化して捉えており、むしろ健康でありたいという「私」の欲望が浮き彫りになるのである。

そしてこの他者化は、先に述べた病いの二分法的構図をより強固なものとし、その上で揺れる「私」自身をさらに苦しめるものとなっているだろう。「私」は、実体などないはずの病いの二分法的構図を語りによって自ら創り出し、そこで病いを他者化することで、逆にその対極的な性質を補強してしまい、自縄自縛の状態に陥っているのだ。

また、唯一の例外として、医者の場合についてのみ「私」は、「その助手らしい医者は、気がつくくと足がちよつと悪かった。その医師は口数が少く、自信ありそうで、私は信頼する気持になった。足の悪いこともかえってその青年の心を、この眼科医学に集中するのに役立つように思われた」(522頁)、「眼医者が二人とも持っている症状なら、心配なことはない、と私は思った」(524頁)などと、身体に不調があることを好意的なイメージで語ることはない言及しておこう。「私」が一般患者の病いには差別的なイメージを語るのとは対照的である。これらのことから、診断によって病いを確定する存在としての医者の存在を重く捉える「私」の姿が見出せる。

以上のように、「私」は病いを患っている側としない側とを診断によって切り分けられるものとして対極的に捉えた、実体のない病いの二分法的構図を語りによって創り出した。「私」が揺れる心理は、その二分法的構図の中で「私」が何度も境界線を引き直そうとする行為を語ったものだったのである。そしてこのような二分法的構図の上で境界線を引く自己を緻密に語ることで、「私」はあたかも重病に至る病いを経験したかのように自身の体調不良の経験を「病歴」として語り出しているのだ。さらに「私」は、病いを患った人間に対する差別的なイメージを抱くことで病いを他者化して二分法的構図を補強し、「私」自身を苦しめているのである。

第四節 健康を語る「私」

第三節では、境界線で分けられた二者のうち、病いを患っている側について「私」がどの

ように認識して語っているのかを見てきた。では、病いを患っていない側について、「私」はどのように語っているのか、ということについても考えておく必要があるだろう。

病いを患っていない側に属したいということは、単純な捉え方をすれば健康でありたいということである。よって、まずテキストの中で「私」が「健康」という言葉を語る箇所を見てみたい。

(ク)しかし、この講演会の日程、この人々、と眼の前にあるものと、私の健康らしい外貌とが結び着いて私の動きかたを決定してしまうのだ。私は外の人たちと同じように宿に着くと風呂へ入り、酒を飲み、議論をした。(515頁)

(ケ)大変なことだ。そうなれば、この旅行が滅茶苦茶になる。(何という比較だろう)。それどころか私のこれからの生活も滅茶苦茶だ。とても、そんな怖ろしいことは、と私は考えて、はつとする。それが怖ろしいことというのでお前は、健康な人という資格でこうして毎日平気で動いているのか、ええ？問いつめられて私はだまってしまう。(516頁)

「私」は、病いを患っている側に属することを強く拒み、病いを患っていない側に属したい、つまり健康な人間でありたいという強い意識を持っていた。しかしながら、この引用箇所を見てくると、「私」は「健康」を、それほど幸せで魅力的なものとして認識しているのか、という疑問を持たざるをえない。(ク)から分かるように、「私」は実際に健康な人として生活することには違和感を持っている。そして(ケ)から分かるように、「私」自身、健康とは何なのか、ということをもそもそも明確には認識できていないのである。

ここで、野村一夫による次の指摘を見てみよう。野村は、健康について、次のように述べている。

健康とは、健康という実体があると想定されて語られる一連の豊饒な言説群に他ならない。／社会構築主義やその源泉の一つである言語行為論やエスノメソドロジーなどが指摘するように、言説は指示する行為であるとともに事実行為である。(略)／健康は、このように構成される。それがあると想定されて語られることで、あたかもそれが実体として存在するかのように語ることが可能になるという自己言及的言説によって社会的に構築され続ける共同言説空間である。／最後にもう一度確認しておこう。健康は言説である。言説としての健康、ではない。⁴¹

野村は、健康が言説なのであり、そもそも実体など無いものであるということ、強く主張している。野村の指摘を踏まえれば、健康とは具体的に何を指すのかということ「私」

が具体的に認識出来ないことも無理はない。すなわち、「私」が語っているのは実体のない病いの経験であった一方で、「私」が頻りにそちら側に属したいと望んでいた健康の方も、そもそも実体のないもの、つまり幻想なのである。

では、そのような健康を、「私」はどのようなものとして語り描いているのだろうか。

まず、あれほど強い疑念を抱いた「私」が、自分が「健康」であるということ自身自身に対して証明する一番の手段として位置づけていたのが、血液検査である。実際に「徳山医師」によって赤血球沈降速度を測ってもらった時のことを「私」は以下のように語っている。

結核などが進行しているとき、赤血球沈降速度が、二十とか三十とかになることを私は知っていた。雑談しているあいだに「時間経った。見ると私の血は、ちっとも沈殿しない。初めのとおりほとんど全部が赤く見え。その上の層に一分ほど透明な部分が出来た。医師は目盛りを見て、／「赤沈一ですな。これ以上の健康体はありませんよ」／赤沈一には私も至極満足し、それ以上医者を追求めなかった。背中の疵は大分大きいものらしく、私は十二日おきに、一カ月ほどこの医師に通い、やっと治癒した。(518～519頁)

引用部分では、徳山医師は赤沈降下速度の測定結果を示して「健康体」であると言い、「私」は「至極満足」する。これ以降も、「私」はこの出来事を振り返って、血液検査を求める心情を繰り返して語っている。また、特に傍線部では、「私」が詳細な数字を繰り返して示しながら血液検査とそれに付随する出来事を語っていることに注目できる。このように、「私」は健康の証明として血液検査という客観的な基準を強く求め、それを語る時には、具体的な数値を元にして自分の健康を語ることが分かる。これは眼病の疑いを持った時にも同様のことが見られ、「右が十二度左が十六度で、大した近眼ではない」(519頁)など数値を基にして自分の健康状態を認識して語る。このように、「私」は、健康を数値によって測れるようなものであるとして語っている、と言える。

また、健康についての「私」の語りとして、カリエスの疑いを抱いた北海道旅行中の次の箇所にも注目してみたい。引用するのは、北海道旅行中、「私」が「人の眼に差支えなく映る外面」(519頁)のとき、つまり健康な人間として過ごしているときの生活について語った部分である。

(コ) 彼は、旅行は朝早く起きなければ駄目だ、という原則を見つけて、私に朝起きを強いた。(514頁)

(サ) その旅行の初めの一週間は、ある雑誌社の催した講演旅行なので、予定が細かく区分され、新聞の予告やビラが刷られ、私と秋山と外三人ほどの「講師」は、講

演会場から座談会場、それから寝台車という順で、北海道の西部の諸都市を目まぐるしく運ばれているので、自分の時間が全くなかった。私はその日程を守ってゐた。(514頁)

(シ)しかし私は会場から汽車へ、汽車から宿へと自動車で運ばれ、人に紹介されたり、会場にぎっしり詰まった人々の顔に向つて喋ったりする隙間のない日程を、一つ一つ片づけて行きながら、自分に言つて見ていた。(515頁)

以上の引用箇所を見ると、「私」は健康な人間として過ごしている時の日常を、「原則を見つけて」、「予定が細かく区分され」、「隙間のない日程」など、一定の規則で流れているののように語っていることが分かる。病気になることは、この健康の規則から外れることだ。加えて、「運ばれている」、「人に紹介されたり」など、その生活を受け身的なものとして語っている。また、健康な生活の中で過ごす自分を鍵括弧付きで「講師」、相対する人々の「顔に向つて喋」る等、その中で生きる人々の個性が削ぎ落とされ、無機質に表象されている。

このように「私」が語る健康を見直すと、「私」は、病いを患っていない側に属することを求めているものの、だからといって健康が何を指すのか具体的に認識できていないことが分かる。その中でも「私」が健康をどのようなものとして語っているか分析すると、それは自分の身体の状態とは最早関係なく、一定の規則に沿つてどこかで流れているもので、受け身的なものとして語られているのである。このように「私」は、病いを患っている側に属したくない心理を再三語る一方で、実は健康についても、自分を属させることができていないのだ。

では、「私」はどうして、病いと健康のどちらにも、自分を位置づけることができないのだろうか。

この問題を考えるために、「病歴」発表当時の「健康」を取り巻く状況について確認しておきたい。第一節で引用した徳田戯二は「病歴」について、「現実決戦下の状況の中で何か空々しい馬鹿々々しさを感ずる」と述べているように、「病歴」は一九四三年、太平洋戦争の戦時体制下に発表された作品である。テクスト内の出来事が具体的にいつの出来事であるのか語られることはないが、少なくとも「病歴」発表当時の読者は、徳田のように同時代の状況を前提として、この作品を受容しているだろう。

川上武は、「戦時体制にともなつて厚生行政が戦力増強にかくべからざるものとなり、健兵健民政策は国策の一つとなり、医療関係においても、軍の主導権下に官僚統制を強化する

方策がとられてきた。すなわち、厚生省の創設、社会保険の拡充、人口対策、結核対策、母子衛生など一連の政策が強力に推進されてきた」⁴²と述べている。つまり、戦時下にあるからこそ、健兵健民政策の下医療関係が統制されたのである。実際にこの時期には、厚生省が設立（一九三八年）され、国民健康保険法（一九三八年）、国民医療法（一九四二年）などが成立している。

美馬達哉は、医療や保健の分野において第二次世界大戦前と戦後が対比的に（例えば戦前の「不十分」な医療・戦時下の軍事医学の「悪用」に対して戦後の「福祉国家」捉えられてきた一方で、実は「総力戦」時の近代医療は驚くほど「近代的」であり、現在へとつながる医療システムと「福祉国家」の制度的基盤が築かれたのは、占領軍による「民主的」改革ではなく、戦時（総力戦体制）下一九四〇年前後である、ということを描いている。そしてこれらを踏まえ、美馬は当時の「健康」について、次のように述べている。

総力戦体制下においてはじめて、社会保険制度が体系的に整備されたことの意義を過小評価することはできない。／（略）むしろ、国家のまなざしの側で、国民の「健康」という問題設定が浮上したのがこの総力戦体制の時期であると考えべきなのではないだろうか。⁴³

また、美馬は次のようにも指摘している。

第二次世界大戦下の総力戦体制のなかではじめて、医療はこうした限界を打ち破り、理念としては人口全体を対象とする「国民医療」となり、国家装置の不可欠の要素として組み込まれた。（略）さらに、それは、国民の側からみても、一人一人が医療を通じて健康にならねばならないということを意味し、戦後の「ヘルシズム的アイデンティティ」の先駆けとなった。⁴⁴

このように、戦時中こそ医療制度が大幅に統制され、結果として社会の中で「健康」が目指されるべき問題として前景化してきた時期であったことが分かる。一方で杉山章子による次の指摘にも触れておこう。

国は、兵力や労働力の低下を防ぎ、人的資源を確保するために、前述したような「保健国策」を講じている。ただし、回復の難しい病人、障害者はその対象から除外されていた。（略）この冷徹な措置によって、病氣や障害を抱えた人びとは、生活上の不利益や健康上の不安を増幅させただけでなく、「役に立たない人間」として差別や偏見にさらされて苦しむことになった。⁴⁵

医療や保健の制度が発達し、社会の意識が健康へと向けられることは、反対にそこから疎外

される存在も生んでしまったのである。

以上のように川上、美馬、そして杉山の指摘を見てきた。これらの指摘から、次の二点が分かるだろう。まず一点目が、「病歴」が発表された戦時体制下は、医療制度の統制によって健康が目指されるべき問題として可視化された時代であったということ。そして二点目が、健康から逸脱することは社会の枠組みから外されることを意味していたということである。「病歴」の「私」も、病いを患った他者のことを差別的イメージで語っていることは第二節で指摘した通りであるが、その意味では「私」も二点目に指摘したような意識を内面化していると言える。また、病いを患っていきそうな「私」自身についても、単純に病いの疾病としての症状の辛さを怖れているだけでなく、上記のようなことによって日常性が破壊されることを恐れ、「健康」側でいることを過剰に求めている、とも言える。

「病歴」における「私」が病いと健康の間で揺れるのは、病いが差別化されながらも健康も制度によって強固に規律化されたものであり、どちらに属することも積極的に決定できない同時代の背景が絡んでいるのではないだろうか。

さらに、病いと健康のどちらにも自分を属させることができない「私」の在り方を考察する上で、次の富永と小林による指摘を見てみたい。

まず、富永茂樹による健康と病気の関係についての指摘を見ていく。富永は、「健康と病気とは人間の両側に互いに否定しあいながら存在して」おり、「健康と病気、生と死とは、互いに否定しあいながら、いずれも人間に可能性をもたらすのであって、否定し合う片方のみがより重要なのではない」と述べている。そして、「それゆえに片方に与してもう片方を否定し去ること——これは相互の否定性とそれを前提とする人間自身を打消すことであり、自己を無化することである」ことを指摘している。⁴⁶

そして以上のような富永の指摘を受け、小林昌廣が次のように述べている。

富永茂樹は（略）、健康と不健康（あるいは病気）とが直線的な二項対立関係にはなっていないことを指摘している。現在の健康追求型の社会では、健康―病気、あるいは生と死の両極端に挟まれている人間は、片方（健康）に与して、もう片方（病気）を否定し去るという態度を一貫して採択しているため、両者の相互否定性を打消すこととなり、さらには自己を無化（一層重大な死）することになるというのだ。（略）／（略）

病気と健康とは、実体的分類という「線引き」によって分離が可能であるとする考え方に対して、富永流に、人間は病気と健康との二端点を自由に移動し、両者の拮抗関係の中で生きているのだ、健康と病気のグラデーションの間隙を漂っているのだ、と反論

富永と小林の指摘を参考にするならば、そもそも健康と不健康(あるいは病気)は直線的な二項対立関係ではそもそももない。そしてその二者は、「私」が語っているように明確に分けられないものなのであり、どちらかを打消そうとすることは、自己を無化することに繋がるのである。「私」が病いかどうかという疑念に苛まれ続けてしまうのは、病いにも健康にも実体が無いにも関わらずその二分法的構図を自ら構築し抜け出せないこと、そしてそのどちらか(ここでは健康である側)に属しようとして、もう一方(ここでは病いを患った側)を打消そうとしてしまうことによって、自己を見失いかけている結果であるとも捉えられるのだ。

第五節 本章のまとめ

本章では、伊藤整の短編小説「病歴」について、一人称の語り手「私」が病歴を語ることの意味を分析してきた。

「私」の語りは「現実」や「真実」を表しているとされ、病いかどうかという疑念に苛まれる過程を緻密に語っていると思われるが、実はずっと実体のない幻想の病いの経験を語っているのであり、その体調不良の経験を「私」が歴史化して語ることによって病歴たらしめていた。

「病歴」のテキストでは、「私」が自分自身の病歴を語っている。その際、実際に確定された病いの経験を要約・省略し、反対に現実的には「病いではない」と診断によって確定された実体のない病いの経験を方々事細かに語っていた。そして、「私」が病歴を語ることに、この幻想の病いの経験を病歴たらしめているのである。

そして、「私」があたかも重病に至る病いを経験したかのように、幻想の病いの経験を「病歴」として語り出すことは、「私」が病いの二分法的構図を語ることで可能になっている。「私」が揺れる心理は、その二分法的構図の中で「私」が何度も境界線を引き直そうとする行為を語ったものだ。加えて「私」は、病いを患った人間に対する差別的なイメージを抱くことで病いを他者化し、そのことは結果としてこの二分法的構図を補強し、「私」自身を苦しめることになっている。

一方で「私」が望む健康についても、実は実体などないものなのであり、それは「私」の健康に関する語りにも表れている。「私」が病いにも健康にも属することが出来ないのは、同時代における病いに対する差別と極度に規律化された健康、という医療を取り巻く状況

が絡んでいとも考えられる。また、富永・小林による、病いと健康が二項対立的ではなく相互否定性を持ったもので、どちらか片方を消去することは自己の無化につながるという指摘があった。この指摘から、「病歴」の「私」が語る病いか否かの疑念に苛まれる苦しきは、「私」が実体のない病いと健康の二分法的構図を構築し、そのどちらか一方に属しようとしてもう片方を打消してしまうことによって、「私」が自己を見失いかけている結果なのだと捉えることが出来た。

「私」の病歴とはこのように、実体のない病いと健康の言説に、「私」が翻弄された歴史なのである。「病歴」において「私」が自己の病歴を語ることは、病いと健康の言説に翻弄される人間の姿を暴き出していると言える。そしてそれだけではなく、「私」の病歴の語りはその個別性を越え、誰もが病いと健康の間で生きているという人間の在り方を可視化し、私たちの目の前に示しているのである。

※本研究では、『伊藤整全集―第二巻―青春 他』（新潮社、一九七三年）に収録された「病歴」をテキストに用いた。

第四章 吉行淳之介「決闘」に見る病いの実体化のプロセス

第一節 「決闘」について

本章でも、前章に引き続き(二)自分が患った病いそのものに対するイメージを幻想化して語る作品を分析していく。前章で取り上げた伊藤整の「病歴」では、あたかも「私」が「自分は重い病いにはならない」と高を括ったことよって病いの兆候が現れるというように病いが不気味に語られた。本章では、主人公の「僕」が病いによって一層不思議で奇妙な体験をする、吉行淳之介の「決闘」という作品を分析する。

吉行淳之介の「決闘」は、『別冊文藝春秋』第五四号(一九五六年十月)に発表され、短編集『悪い夏』(角川書店、一九五六年十一月)に収録された短編小説である。

まず、簡単にあらすじを確認しておこう。「僕」のところに、そりが合わず久しく疎遠だったKから『君は、もうエビは食べられないぞ。』というハガキがきた。Kから繰り返しハガキが来るうちに、自分の中にエビに対する嫌悪の念が忍び込んできて、「僕」はエビを食べるのを躊躇するようになった。数日後、Kから今度は『喘友会会報 四季』という小冊子が届き、その中の喘息患者たちの声を読んだことをきっかけに、「僕」は喘息に関する知識を収集し始めた。すると収集した喘息の知識が僕の体にしみこんでいくような気持がした。そんな時、Kとの共通の友人・L君から、「Kがエビで喘息の発作を起こすようになってから、元々蝦喘息だったM君がエビを口にすると、異常が起こらなくなった」と耳にした。Kは、M君の方から移住した蝦の喘息を、今度は「僕」の方に送り込もうとしている、と言う。数日後Kから、KとMと「僕」で『エビを食べる会を開催する』というハガキが来た。「僕」は、自分はずっとひどい発作を起こすだろうと予感しながら、会へ赴いていく。

作者の吉行淳之介(一九二四～一九九九)は周知のとおり、戦後派の後を受けて、昭和二十年代末から三十年代にかけて登場した「第三の新人」の一人として位置づけられた作家である。片桐葉子は吉行のことを「おもに男女の関係を通して人間存在の本質を追究しようとする一貫した姿勢と、反俗の詩精神、簡潔で明晰な文体で、独自の作風を築き、戦後文学の第一人者として活躍した」⁴。作家であると述べている。「決闘」では「移住」する蝦喘息が作品の面白さの一つとなっているが、吉行自身も喘息を患っており、加えて同時に肺結核なども病んで、長らく病臥する生活を続けていたことが知られている。実際に吉行の自筆年譜⁴を参照すれば、一九四三年一九歳のときには陸軍入営三日目に気管支喘息と診断され帰

郷を許されたこと、一九五四年三〇歳の時には、「驟雨」で第三一回芥川賞を受賞するも病状の悪さにより受賞式を欠席したことなどが記されている。その後も病気による休養を繰り返し、「決闘」を発表した一九五六年三二歳のときについても、自筆年譜には「この年も病臥といってよい。体力不足で、一日に、二、三枚ずつ小刻みに書いた。」とある。このような吉行自身の病気の体験は少なからず作品の成立に関わっているだろう。また吉行は一九四二（昭和十七）年九月にはじめて喘息発作を起したが、「ただし、当時は、アレルギーとかゼンソクの研究が進んでいなかったので、単純な風邪と見做された」⁵⁰と語っていることから、喘息は原因不明なものであったからこそ、「決闘」のように不気味に描かれやすかった、という可能性も考えられる。

先行研究でも、吉行の病い、または病いと彼の作品の関連について言及されることは少なく、病いは吉行の作品を解釈する際に注目される要素の一つであった。「決闘」と吉行の病いの関係についても、清岡卓行が次のように指摘している。

吉行淳之介の場合さらに、いろいろな病気の体験は、さまざまな文学作品の生き生きとした題材になっているようである。／それは、たとえば「治療」（昭和二十九年）や「決闘」（三十一年）のように、喘息の症状と取組み、病気の原因が神経や心理などにあるのではないかといった幻想的な雰囲気をもたらし、アポリネールの詩的な短篇と比較してみたくなるような、緊迫した結晶美の小説を形づくることがある。／（略）／譬えていうなら、これらの作品は、時代に便乗したり他人に迷惑をかけたりしないかわりに、自分のささやかな主我性をあくまで守ろうとする文学者が、たまたま強いられた病気という奇妙な城、つまり、名伏しがたい苦患であると同時に、社会の無法な力から保護してくれたり、新しい生活を示唆してくれたりする城において、守備から攻撃に転じるかのように繰り返りひろげてみせた、人間認識の壁画のようなものではないだろうか。⁵¹このように清岡は吉行が「決闘」に自分の病気の体験を生かしていること、そして作品の執筆に対して吉行の病気が持っていた意味について指摘している。

しかしながら、清岡の指摘を除けば、過去の研究でこの短篇小説「決闘」が論じられたことはほとんどない。ここでは、「決闘」に言及された先行論について、管見の限りで見つけられたものを紹介する。

小嶋洋輔は、吉行の長編作品「男と女の子」について論じる中で、「決闘」についても触れている。この論文の中で小嶋は、吉行が、発表する雑誌メディアの違いによってどのように作品を書き分けていたのかを論じている。その中で、中間小説誌や婦人誌、週刊誌などに

掲載する「中間小説」としての「決闘」と、文芸誌に掲載する「純文学」としての「男と女の子」の関連について引用のように述べている。

また、『決闘』（別冊文藝春秋）一九五六・一〇）は、主人公「僕」の友人Kが蝦アレルギーで蝦を食すと喘息の発作を起すという、アレルギーを趣向として用いた作品である。さらにその蝦アレルギーは元々MがKにうつしたものだという。そしてKはそれを今度「僕」にうつそうとしている。このアレルギーが「神経が絡まり合」つてうつるという設定は、『男と女の子』の「臥竜荘アパート」の男の話す話に発展して用いられている。⁵²

「決闘」における喘息の「移住」という特徴的な要素は、吉行の作品間で関連が見られるのである。

また、吉行淳之介の「決闘」や「治療」を取り上げて論じた著書には他にも鈴木秀男『イメージの病いーモデルとしてのぜんそく』（清水弘文堂、一九八五年）があるが、この研究についても、吉行の両作品で語られる喘息を症例として捉えたり、両作品に見出される患者としての吉行の喘息の捉え方を分析したりしている点で、本稿とは観点が逸れるので紹介することとどめておく。

最後に、平岡篤頼による指摘を見ていく。平岡は、吉行の世界が、「心身相関的な連続と不連続の交錯から成り立っている」としたうえで、次のように述べている。

喘息について考えること、あるいはまた喘息についての知識を蒐めることが、自分は喘息ではないかという気持を培養し、やがてほんものの喘息患者たらしめる危険があることは、「決闘」で見た通りであるが、小説を書くという行為は、多分にそれに似た影響を作家に及ぼすものだということが、意外にしばしば見落とされる。(略)／ただ、吉行の場合、小説がそうした症状の治療法としてはたらく側面があることも見逃してはならない。生理にとつての連続が心理の次元に突如〈異変〉として溢れ出すこと、逆にまた、心理にとつての連続が生理の次元に突如〈異変〉を発生させることが、喘息に特有の悪循環だとすると、小説を書くうちにその中に巻きこまれれば、小説はアレルギーンとしてしか働かないが、その悪循環の形を見抜いて小説の中にそれを再現すれば、作家は悪循環の外側に脱け出すことになる。(略)／(略)すなわち、彼は〈異変〉を記録し、報告するにとどめず、〈異変〉を解剖し、その凶面や写真を研究し、それからあらためて〈異変〉を再構成する。喘息とか結核とかのみずからの病歴を振り返る時にも、私小説とならないのはそのためであるが、最初からフィクションを意図した小説では、

彼はさらに大胆な一步を踏み出す。⁵³

平岡は、「決闘」における「喘息」について考えて自分が喘息だという気持を培養することで、やがてほんものの喘息患者になる」という要素と、作家と執筆の類似の類似を指摘している。ただし、「吉行の場合は小説がそうした症状の治療法としてはたらく」こともあるのだと言ふ。さらに、吉行は「異変」を記録・解剖・研究し、「異変」を再構成」していること、だからこそ彼の小説は私小説とはならないことを指摘している。吉行は自分自身の病いをそのまま小説に写し取っているのでは決していない、ということだ。

では、「決闘」において喘息発症のエピソードが構成される際には、どのような手順が取られているのだろうか。確かに、「決闘」の「僕」が、「大エビを食べる会」で本当に発作を起こしたのかどうかは語られずに終わる。しかし、テキストを詳細に分析していくと、語り手である「僕」は間違いなく病いを引き起こしていくであろうことが分かってくる。本章では、「決闘」のテキストにおける喘息を患った「僕」による幻想的語りを注意深く分析していくことで、「僕」が一見奇妙に病いを引き起こしていくプロセスを具体化していきたい。

第二節 一人称「僕」による語りの位置と態度

まず、「決闘」における一人称「僕」による語りはどのようなものなのか考えていく。先に引用したのと同じ平岡論の中ではもう一つ、「喘息について（一向不案内）なはずの話者〈僕〉が、そこまで喘息患者の内情に詳しいというところに、この短篇の均衡の危うさがあるが、しかし、そんな男が意図的に張られた罫にずるずるはまりこんで、ほんものの喘息者になっていくところに、経験から割り出した作者の人間観が鮮明なくらいに透けて見えている」という指摘がある。「喘息について（一向不案内）のはずの話者〈僕〉が、そこまで喘息患者の内情に詳しい」ということについて、実際にテキストの中でどのように語られているのか詳しく確認してみたい。

「僕」のところにKからの第三信（謄写版刷りの小冊子）が届き目を通した後、喘息については「不案内」だったはずの「僕」は、次のように語る。

ひどい喘息患者である西欧の某作家は、気温と気圧が変化を起しにくいようにコルクで張りめぐらした小さな部屋の内に、自ら密閉されつづけていたそうだ。（略）彼だけではなく、すべての喘息患者は、とかくその場所に閉じこめられがちになるのである。／人類の歴史に最もはやく誕生した病気は、この喘息だそうだ。（略）／そして、この症状は、青天の霹靂という言葉どおりに、人体の中に潜りこみまたぬけ出し

てゆく。昼が夜になるには黄昏と呼ぶ薄明の時刻があるが、この症状に関しては瞬きする間に昼が夜になっており、また、夜が昼になっている。「神の怒り」とか「悪魔の誘い」などという言葉が、これほどふさわしいものはなかなか見当たらない。そして、この異常な症状の根本の原因は、いまにいたるまで明確にされていないのだ。／＼古来この症状とうまく遭遇して、あるいは利用して名声を博した祈禱師の数ほどのくらいあるだろうか。王侯の寵を一身に受け、奇蹟の手を謳われた人物で、この喘息と手を握り合ったものも寡くはなかったことだろう。(379～380頁)

このように、かなりの量の喘息に関する知識を前提として語っていることが明らかである。しかし、「僕」が「喘息に関しての知識を蒐集しはじめたことになった」(382頁)のはこれよりも後のことだ。このように平岡の指摘通り、喘息について不案内の「僕」が喘息患者の内情に詳しいことはテキストから読み取れるが、一方でそのことは平岡の言う通り「この短篇小説『決闘』の均衡の危うさ」なのかというところではない。結論を先んじて述べてしまえば、喘息に不案内の「僕」が喘息の事を詳しく語るといふ矛盾が起こっているのは、「僕」が出来事をそのまま語っているのではなく、一度起った出来事を事後的に語っているからだと考える。

では「僕」はどの時点から語っているのかというと、「大エビを食べる会」(389頁)に赴いているときではないかと考えられる。それは、「それから数日経った今日」(388頁)と時間が明確に表示されることから分かる。

また、「それから数日経った今日」以降の語りの文末に着目したとき、テキストのそれ以前とは対照的に、「歩いてゆく」(388頁)、「書き記されてある」(388頁)、「向っているのである」(388頁)といったように、そのほとんどが連続的に現在形で語られていることに注目できる。このことによって、今まさに起こっているのだということがかなり意識的に語られ、「僕はきつとひどい発作を起すだろう」(390頁)という確信した未来に強く集約していく臨場感が与えられているのである。

ここで、「大エビを食べる会」に向かう今日を「現在」、それ以前を「過去」、そして「僕はきつとひどい発作を起すだろう」という出来事が起こる時間を「未来」として考えてみたい。すると「過去」の部分については、「今起こっていることを語っているように装って」語られていることが見出せる。

例えば、先に「現在」を表す時間の表示として「それから数日経った今日」を取り上げたが、「過去」の部分の語りにおける時間の表示に「先日」、L君がKのことを話題にした。な

んでもKが不可思議な病気になって閉口している、ということであった。もともとKには喘息の持病があつて、それは季節の移り目の不安定な気候によって発作を惹き起こすという平凡な型のものだが、蝦や蟹を食べると発作が起るといふ特殊な型に最近変化してしまつたのだそうである」(375頁) というものがある。この傍線部における時間の表示を受ければ、初読の時点の読者はあたかも「僕」が今起こっている出来事を語っているかのような印象を受けるであろう。

他の例も見ておこう。

(ア) 災難は、いつ降りかかってくるか、知れたものではない。(略) / このハガキと一緒に、災難の先触れが舞いこんできたのである。(374頁)

(イ) いずれにせよ、児童に類することだ、と僕は一笑に付したつもりだった。(376頁)

(ウ) 僕は喘息について一向に不案内だが、厭でもそれに関しての知識をかり集めなくてはならぬ状態に、軀の組織のすみずみまで陥りそうな予感がある。(378頁)

(エ) かつていろいろの試験の勉強をしたときにはほとんど経験しなかつたことであるが、その知識が素早く体内に入りこんで、そのまま肉体の組織の一部となつてゆくようだ。(382頁)、

(オ) とところが今度の場合、蒐集した喘息の知識が僕の軀に浸みこんで、この症状を培養するのに絶好のものになつてしまつていふような気持がするのだ。(383～384頁)

右に引用した(ア)から(オ)の箇所を見て来ると、まるで「僕」がこれから起こることを予感してならないように語られており、読者も初読時点ではこれから起こることが予想的に語られている印象を受けるだろう。しかし、ここで語られていることが、「現在」から振り返つて語られていると考えれば、「僕」はこれから起こることを不気味に予知しているわけではないことが分かる。さらに細かな例も見ておけば、例えば「このように僕の気持ちに起伏が生じたため、困つたことになつてしまつた」(387頁)なども、後に語ることながらを先んじて述べている、つまり「困つたこと」の内容が後から語られており、単純に時系列順にその場で起こつたことを語っているのではないことが読み取れる。このように「僕」は、事後から過去の出来事を振り返つて語っているのに、あえてその時点ではそれを隠蔽し、今起こっていることを語っているかのように装うことで、これから起こることを予知しているような不気味な印象を持たせる語り方をしていふのである。

以上見てきたように、本テキストの語りは、「それから数日経った今日」、「大エビを食べる会」に向かっている時点から語られていることが想定できる。さらに、「過去」のことを語る事後的な語りについては、今起こっていることを語っているように装うことで予知的な印象を持たせ、同時に「現在」のことも分かりやすく現在形を多用することで前のめりな印象を持たせている。このことよって「決闘」の語りは、「僕はきつとひどい発作を起こすだろう」(390頁)という「未来」への確信を、物語の内容だけではなく語り方の側面からも強化しているのである。

もちろん、このことは、読者にも「僕」の喘息発症の強い予感を喚起させる。そもそも「決闘」における「僕」の語りは、テキスト全体を通して、かなり聞き手、読者を意識したものになっている。次の例を見てみよう。

(カ) 外見だけ見ても、底意ありげないかがわしいハガキであるが、内容に関しては少々説明しなければ何のことやら意味が通じないであろう。(374～375頁)

(キ) 二、三例を挙げてみよう。(382頁)

例えば(カ)では「僕」は読者に意味が通じるように「少々説明しなければ」などと語る。(キ)でも、誰かにより分かりやすく説明するために例を挙げる。このように、「僕」は極めて明確に読者の存在を意識して語っていることが分かり、このことは先に指摘したことにもつながる。例えば予知的な語りよって、「僕」は読者にも「僕がきつとひどい発作を起こす」という予感を強く喚起させる。「僕」は自分自身の語りの力だけではなく、読者をも巻き込み、読者にも「僕」が喘息発作を起こすという期待を持たせることよって、「喘息発症」へと自分自身を追い込んでいくのである。

以上見てきたように、語り手「僕」は、Kよって蝦喘息を発症させるよう仕掛けられて、それを拒み抗っているような内容を語っている一方で、それを語る際には、「僕」自身、発作が起こるとい確信を背景に自分自身を喘息発症に追い込んでいくように戦略的に語っているという矛盾、「ずれ」が見出せる。また、喘息発症に自分自身を追い込んでいくように語ること、例えば先に挙げたように、今起こっていることを語っているように装って語ることよって、読者にも喘息発症を強く予感させ期待を抱かせることで、「僕」を追い込む共犯者として巻き込んでいく。つまり「僕」は、幻想から喘息を発症させられることに抗っているようで、語りの面ではそれを受け入れて自らを喘息発症に追い込むだけではなく、むしろ今度は「僕を自分の領域に引きずり込んでゆこうとする」(386頁)というKがやっているのと同じように、「僕」が読者をそちら側に引きずり込むような矛盾した態度をとって

いることが見出せるのである。

第三節 喘息発症のプロセス

前節においては、語り手「僕」自身が内容的には喘息に拒み抗うことを語りながらも、語りの面では自分を積極的に喘息へと追い込んでいる矛盾を指摘した。では、「僕」が蝦喘息を発症させていくプロセスは、具体的にどのようなように語られるのだろうか。

それを明らかにするために、まず喘息発症の直接的な要因である、友人Kの行動に着目しておきたい。テキストの中でKが直接登場することは一度もない。登場人物としてのKは、冒頭で「僕」によって語られる「Kの顔はすぐニコニコと笑いを浮かべるが目の奥は笑っていない」などといったKの人物像の語り、または「僕」とKの共通の友人・L君から聞く間接的な話によって描かれるのみである。「僕」とKの直接の関わりも、テキストの中ではハガキを介してしか生じることはない。よって読者が直接Kを知ることが出来る手がかりも、Kが「僕」にハガキなどを繰り返し送ってくるという行動、そしてそのハガキに書かれた内容だけだ。そこでまず、Kからのハガキの内容を確認する。

(ケ)『君は、もうエビは食べられないぞ。偏執狂のサルヴァドル・ダリは、真赤に塗った卓上電話機に、生きたエビを受話器のかわりに取りつけて展覧会に出品したそうだ。右とりあえず、おしらせする』／それだけの言葉が、ハガキの狭いスペースから、はみ出しそうな感じに記されてあった。大きな稚拙な文字である。その文字につながる精神構造のわるさを露骨に現している、理不尽な、押しつけがましい書体である。しかし、これはK君本来の書体とは違う。この書体は、僕に与える効果を計算の上で造りなされたものにちがいない。(374頁)

(コ) 数日経って、またKからハガキが来た。前便とは対照的なサクレ立った細かい字で、ごちやごちやいっぱい書いてある。書体自体でイライラさせる効果を狙っているのだが、最初の数行を読んで、たちまち不愉快になった。(377頁)

(サ) Kがよこした三通目のハガキで、それには前二通とはがらりと違った達者な筆跡で、こう書いてあった。／『大エビを食べる会を開催します』(388～389頁)

Kが「僕」を蝦喘息へと引きずり込むために行っているのである。直接的な働きかけは、以上のようなハガキを介してのみ実行される。すなわちKは、「僕」に幻想の中のものであったはずの蝦喘息を実際に発症させるという目的を達成するための唯一の直接的な手段として、「言葉」を選択しているのであり、「僕」は言葉によって蝦喘息の発症を促されている

のである。

加えて言うと、Kはハガキに書き記す言葉の書体や構成なども毎回かなり意識的に変えている。そしてこのようなKの文字の筆跡の位相は、先に述べた言葉の力を視覚的な面からさらに増幅させ、「僕」の嘖喘息への誘いを強化しているだろう。実際に「僕」も、Kからのハガキの書体をわざわざ毎回詳細に語り、「この書体は、僕に与える効果を計算の上で造りなされたものにちがいない」(374頁)などと決めつけていることから、「僕」にとっての苛立ちの一つの要因ともなっていることも明らかだ。

先に「幻想の中の嘖喘息が発症する」と述べたが、ここで、ツヴェタン・トドロフによる次の指摘を見てみたい。トドロフは、「すべての虚構、すべての字義的意味が幻想と結びつくのではないが、すべての幻想は虚構と字義的意味とに結びついている。この二つはしたがって、幻想が存在するための必要条件といえる」と指摘している。さらに、幻想テキストの構造的統一の第一の特性として発話、すなわち比喩的ディスクールの特殊な用法を挙げたうえで、次のように述べている。

幻想がたえず修辭的文彩を利用しようとするのは、そこに己の起源を見出すからである。超自然は言語から生まれる。そのことの帰結にして証明が、超自然なのである。悪魔や吸血鬼が語の中でしか存在しないというだけでなく、ひとり言語のみが、常に不在なもの、すなわち超自然を、想像可能にしているのだ。⁵⁴

トドロフの指摘の中に、「超自然は言語から生まれる」、「ひとり言語のみが、常に不在なもの、すなわち超自然を、想像可能にしているのだ」とある。すなわちトドロフは、幻想は言語と切っても切り離せないものであり、言語が幻想を可能にしているということを指摘している。これを踏まえると、Kが「僕」に「幻想から喘息を引き起こさせる」という領域に引きずり込む手段として、ハガキに言葉を記すという手段を用いたことは、非常に理にかなったことだとと言えるだろう。幻想を実体化させるための手段としての言語を巧みに用いたKの策略に、「僕」は嵌められてしまっているのである。

さて、前節で本テキストの語りについて、「僕」は喘息を拒んでいるのに喘息に自らを追い込むように語るといふ「ずれ」があることを指摘した。トドロフの指摘から得た言語が幻想を生み出すという観点に、この「ずれ」を併せて考えたとき、「僕」も作品の中で言語の「ずれ」の瞬間を目の当たりにしていることが見出せる。次の箇所を見てみよう。

(シ)エビというものの姿を見るのは生れてはじめてだった彼は、アツ虎がいるっ、と思っただけだ。虎という恐ろしいけどものについても、その形は知らずに話だけさんざ

ん聞かされていたのだ。だから、エビを見て、虎と思ったわけだ。(377頁)

これはKが「僕」に寄越したハガキに書かれた内容の一部である。「初めてエビを見て、これが虎なのだと思った」という話が書かれているが、つまりこれは「エビ」という事柄について、記号としての言葉つまりシニフィアンと、その指し示す内容つまりシニフィエのずれがおこったというエピソードだ。テクストの中でこのエピソードが何を意味しているのか「僕」やKによつて詳しく解説されることはなく、そのことがこのエピソードの不気味な印象を増している。しかし、「僕」がハガキを読んだことを受けて、「このハガキを読み終わった瞬間、太古の民が夜空の星座のかたちには蠍の姿を見たように、虚空に巨大な蝦が立ちふさがつて僕を威嚇した」(377～378頁)、すなわち無数の星の散らばりをどのように切り分けるかということをあえて語っていることから、このエピソードが内包するシニフィアンとシニフィエのずれを示唆していると言えるだろう。この意味でもやはり「僕」は何も知らないふりをして語っている一方で実は戦略性をもって語っていることが分かる。そして、この言葉と内容のずれが起こった逸話が「僕」に投げつけられたことが、「僕」の中でずっと蓄積されていた蝦という甲殻類に対しての嫌悪の情が「堰を切る」(378頁)引き金になる。また、言葉と意味内容のずれが起こる経験は、手紙の中に出てきた他人事としてではなく、後に「僕」自身の身にも降りかかる。

(ス) L君が言葉をつづけた。／「なるほど『喘友会』なんて、ちよつと珍妙な名だね、
だけど、そんなに可笑しいことかな。それに、『四季』とはなかなか典雅な題名
じゃないか」／(略)／「四季」という言葉は、以前の詩の雑誌にもあつて、僕
はそれからL君の言うように典雅な趣を受取つていたのだが、いまはすっかり
違ったものになつてしまった。(386頁)

「以前の詩の雑誌」にあつた「四季」は、昭和一〇年代詩壇の中心であつた詩誌「四季」で、当時の抒情詩復興の気運の中枢として重きをなした同人雑誌である。「決闘」発表の一九五六年以前には、堀辰雄編集の第一次(昭和八年五月～七月)、モダニズムの洗礼を受けた堀辰雄・三好達治・丸山薫が中心をなした第二次(昭和九年十月～一九年六月)、堀辰雄編集の純文芸雑誌として再刊した第三次(昭和二年八月～二年十二月)があつた。⁵⁵⁾

「四季」という言葉の意味やこの詩誌の印象から、以前の「僕」は「典雅な趣」を感じていた。しかし喘息の予感を持たされた「僕」は、「この文字を可笑しがる組織」(386頁)が体の中にできてしまつていくために、「四季」という言葉について以前の「僕」やL君が捉えたのとは異なつた意味を捉えてしまう。また、L君からの指摘によって初めて自分の認識の

「ずれ」を自覚させられた「僕」は、「Kは僕を自分の領域に引きずりこんでゆこうとする」(386頁)と強い焦りを語り、同時に自らをそちら側に追い込んでいくのである。

このように、「僕」の嘔喘息発症の具体的なプロセスにおいては、言葉が重要な役割を果たしていると言える。Kは言葉を手段として用いることによって「僕」を嘔喘息患者の側に引きずり込む。さらに、「僕」は言葉とその指し示す内容との「ずれ」の経験を積み重ねることによって、嘔に対する嫌悪の念を増幅させ、自らを喘息発症へと追い込んでしまうのである。

第四節 病いの実体化と言葉

さて、以上のように「決闘」を分析したことで、「僕」が喘息に抗う内容を語りつつも、語り方の面では自分自身を喘息へと追い込んでいくという「ずれ」が見られること、また喘息が実体化されていくプロセスにおいては言葉とその指し示す意味内容の「ずれ」が強く作用していることが指摘できた。これらのことは、「嘔喘息が移住する」さらに言えば「幻想から病いを実体化する」という、作品の非日常的な面白さに繋がる一要素だといえるだろう。しかしながら、これらは「決闘」のテキストに埋め込まれた単なる面白い仕掛けだとして片づけてしまっても良いのだろうか。

ここで注目したい二つの指摘がある。まず一点目は、山口昌男による次の指摘である。

診断というのは、徴表群を、個体内部に出現している個人に対する新しいまとまりのある状態の反映と見て、これらの徴表を言語に仕立てて解読する作業である。これらの徴表はそれゆえ記号と見做すことができる。そうすると、診断という作業は一種の記号学ということになる。この記号群が体系的に表現するレベル、つまり小宇宙としての身体が反映する宇宙のレベルを何処に定めるとよいのかというのが、きわめて重要な問題である。肉体のそれも局所的レベルにとどめて解読するのが今日の診断学である。しかし(略)、医者は患者の身体の全体性との関連において解読作業を行なわなければならない。⁵⁶

山口は、「医者と患者を本来、相互主観的なネットワークで包み込む」行為としての今日の「診断」を、「一種の記号学である」と考える。さらに二点目として、立川昭二による次の指摘を見てみよう。

近代西洋医学に基づく現代医療の中心は診断学である。診断とはつまり病名をつけることである。この診断重視の思想はとりわけ特定病因説に根ざしている。これにたい

し東洋医学は病名よりも症状を重視し、したがって全体的医療ともいえるが、それが現代人の病名志向にこたえられない弱味ともなっている。／私たちはがんを診断され、つまり病名を与えられて、あらゆる意味においてがんになるのである。病名が与えられないときは、病理学的にはがんであっても、あらゆる意味においてがんとはいえない。がんはもとよりすぐれて病理学的現象であるが、それだけにとどまらず、さまざまな人間的・社会的な意味をもっているからであり、ひとはそれが与えるさまざまな反応や影響につよく支配されるからである。(略)／ひとは病いそのものを病むとともに、病名という病いをも病むのである。 57

立川も、「近代西洋医学に基づく現代医療の中心は診断学であり、診断とはつまり病名をつけることだ」と指摘している点で、まず先の山口とほぼ同じ趣旨のことを述べている。それに加えて、さらに注目すべきであるのが、引用文の四行目以降の指摘である。ここで立川はがんを例にとりながら、人はがんを診断される、つまり病名を与えられることによって初めてがんになるのだと述べている。そして、人が診断によってがんという病名を与えられたとき、病理学的ながんの症状だけではなく、「がん」という病名が持つさまざまな人間的・社会的な意味までもを内面化し、それが与えるさまざまな反応や影響につよく支配されるのだと指摘している。

診断について述べた以上の山口そして立川の指摘より、病いというものは、「病気から診断名」という順で決定されていると思われるところ、実は「診断名から病気」という順で決定され構築されていく側面があることが分かる。そしてその決定にあたっては、実際の「病理学的現象」としての病気、つまり序章で引用したフォスターとアンダーソンの定義で言う「疾病」、とは本来直接的な相関はないはずの、病名に付随された別の意味をも病むことになる。すなわち、私たちが「病気になる」ときには、診断によって与えられる記号・言葉としての病名が、実質的な疾病に先立って病いを決定し、さらにその実質的な疾病とは結びついていないはずの病名が孕む意味までも自ら取り込んで病いを構築しているのである。このように私たちは病いになる、より突き詰めて考えれば、私たちの病いは「実体化する」のだ。

ここで、同じ吉行の作品で、「決闘」の約三年前に発表された「治療」⁵⁸という作品にも目を向けてみよう。「治療」は『群像』一九五四年一月号に発表された短編小説である。平凡な喘息を患った「私」は、エビを食べると発作が起るといふ珍しい症例の喘息を治療してみたいという担当医師の強い希望を重荷に感じ続けることで、自らエビの喘息を発症させ

ていく。語り手「私」がエビの喘息を強く意識しすぎること、それを自ら発症させるといふ不思議、つまり「幻想から病いを引き起こす」という不思議が、「決闘」に通じている。先にも述べたように、「決闘」については過去にほとんど論じられてこなかった一方で、「治療」についてはいくつかの同時代評を確認することができる。⁵⁹

十返壺は、「治療」を含む「第三の新人たち」の作品について次のように評価している。そのほか新人では吉行淳之介「治療」（群像）長谷川四郎「熊」（新潮）などいわゆる「第三の新人たち」がそれぞれ個性的作品を示しているが、むしろ小個性的世界でのみアクセクしている印象を受けた。これらの新人は、まずなによりも現在のはげしく動きつつ

ある現実との直接的対決を勇敢になさねばなるまい。⁶⁰

また、佐々木基一も、「治療」を含む当時の新人作家たちの作品について次のように評価している。

いま一つわたしの感じたことを云えば、今日の小説の多くはテーマよりむしろ作者の持味にたよって書かれる傾向が強いらしいということであった。吉行淳之介『治療』（群像）とか安岡章太郎とか庄野潤三『噴水』（近代文学）とか沢野久雄『冬の案内人』（文芸）とかいう新人作家までが、みんないわゆる持味作家に小さく固まっています。まいそうなおそれがある。⁶¹

十返が「現実との直接対決が必要だ」、佐々木が「持味作家に小さく固まってしまいそうだ」などと評していることから分かるように、「治療」の評価は芳しくない。何度も述べている「幻想から病いを引き起こす不思議さ」もこれらの評価に少なからず繋がっていると考えられる。しかしながら、「治療」やそのテキストの「幻想から病いを引き起こす」プロセスが本当にとぼけた虚構のようなものなのかどうかということは、先程の山口と立川による診断の観点を踏まえれば、すぐに否定できるだろう。

「治療」のテキストの次の部分に注目してみよう。

「エビを食べたら、十分とたたないうちに腫れてきたのです。やはり、アレルギーの一種だと思えますが」／博士は不機嫌そうな顔で、私に一瞥を与えると、／「いまは、なんでもかんでもアレルギーといって片付けてしまう。困ったものだ。それは単なる皮膚病です」／といい、すっと立上って薬品棚から細長い小さなガラス瓶を取出すと、私の前に差出した。／（略）「しかし、僕のエビの友人は、エビの汁が眼の中へ飛び込んだとき、顔が腫れ上ったと言っていましたぜ」／「それと喘息とは、別のものです。」／すでに博士の口調には、自分の学説を主張する依怙地さと冷静さが現れていた。したが

つて私は「ソレジャア、セツカクノオレノ海老ノ蕁麻疹ヲ、治療シナイツモリナノカイ」という言葉を呑み込んでしまった。そう言ってみたとこで、博士は私の掌の中のガラス瓶を指して「その薬をおつけなさい」と、眉一つ動かさずに答えるにきまっていた。エビを食べて皮膚が腫れた「私」は何故か内心期待しながら博士のところに向かい、アレルギーの一種、つまりエビの喘息なのではないかと問う。しかし、それを否定された「私」は、「ソレジャア、セツカクノオレノ海老ノ蕁麻疹ヲ、治療シナイツモリナノカイ」(88頁)という言葉が今にも出そうになる。つまり、「私」は博士からエビの喘息であるという診断を与えられないことが不満なのである。それが否定されてしまえば、症状としてのエビによる蕁麻疹は最早意味を持たない。そして、診断を与えられないストレスの結果、最終的にはなぜか皮膚の腫れどころか本当の喘息発作が「私」を襲いそうな強い予感がする。つまり単なる技巧の凝ったとぼけた虚構だとされてきた「治療」においても、現実社会における診断と病いの実体化の問題、つまり「診断が与えられることで病いは決定されていく」という要素が見て取れるのである。

さて、「決闘」のテキストは、「治療」のテキストと比較すると、医者が登場しないなどの点において一層虚構性が増しており、それに伴って現実味のない虚構としての印象も強くなるであろう。しかし、「決闘」のテキストも、単なる不思議な面白さを持ったものではなく、現実社会における事象を如実に反映している。先に引用した平岡の指摘どおり、吉行が自身の病気を題材として小説を書き、それを「再構成」しているのだとすれば、「治療」の三年後に類似したエピソード、つまり「幻想から病いを実体化する」ことを題材として作られた「決闘」は、より戦略的に喘息の異変について再構成されている可能性がある。つまり、まず病いが実体化するときには、言葉が大きな力を持つことは、K君が「僕」への働きかけの手段としてハガキつまり言葉の表記を執拗に使い続けたことと通じている。そして何より、診断によって与えられる病名とその病名が孕む意味、認識のずれが実質的な病理学的現象とは違った意味の病いを実体化させていく、そういう風に周囲と自分自身が追い込んでいくというところが、言葉と意味のずれを強いられた「僕」が自ら喘息を発症させていくということに通じている。

山口・立川の指摘から、私たちが「病気になる」とときには、診断によって与えられる記号・言葉としての病名が、実質的な病理学的現象に先立って病いを決定し、さらにその実質的な病理学的現象と結びついていないはずの病名が孕む意味までも自ら取り込んで病いを構築し、私たちの病いは「実体化する」という現代社会の事象を捉えた。吉行淳之介「決闘」の

テキストに見出せる、病いの決定の際の言葉の持つ役割、そして言葉とそれが本来指し示すはずの意味の「ずれ」による「幻想から病いを実体化する」プロセスは、現実社会において病いが実体化されていく見えないプロセスを映し出したものなのである。

第五節 本章のまとめ

本章では、吉行淳之介「決闘」のテキストにおける語り手「僕」が語る幻想から病いを引き起こしていくプロセスを具体化し、そこから社会において病いが構築される、実体化されるプロセスを可視化できた。

まず、「僕」の語りには、Kへの嫌悪や蝦喘息への抵抗を語っているのとは裏腹に、自らを蝦喘息へと追い込む語り方をしている「ずれ」、矛盾があることを指摘した。その際、「僕」はKがやっていたのと同じように読者をも「幻想から病いを引き起こす」領域へと引き取り込み、共犯者として巻き込んでいく。

そして「僕」が、幻想であった蝦喘息を発症させていく過程には、Kが「僕」に対して言葉やその筆跡を用いた巧みな策略を行ったこと、そしてその策略によって引き起こされたシニフィアンとシニフィエの「ずれ」、言葉とその指し示す意味との「ずれ」に「僕」が巻き込まれていったことを見出した。Kから「僕」へは、蝦喘息それ自体だけではなく、「ずれ」を引き起こさせることによって相手を「幻想から病を引き起こす」という領域へと引き取り込む手法までもが「移住」している。このような二層の「ずれ」を見出すことによつて、K、「僕」、読者という三方向から、「僕」を蝦喘息の発症へと追い込んでいく構図が見える。

そしてここまで見出してきたことは、決して「決闘」のテキスト内における不思議な仕掛けなのではない。虚構としての「決闘」の面白さを支えていた「幻想から病いを引き起こす」プロセスは、実は現実社会における病いの実体化の見えないプロセスを巧みに映し出し、可視化したものだったのである。

※本研究では、『吉行淳之介全集 第一巻』（新潮社、一九九七年）に収録された「決闘」をテキストに用いた。

終章

本研究では、日本近代文学において、テキストにおける病いを患った当事者の語り手が幻想的に物語を語ることの意義を明らかにし、そこから私たちが生きる社会における病いを取り巻く言説を脱構築することを目指し、考察を進めて来た。具体的には、テキストにおける病いを患った語り手たちが、病いの幻想によって自己や自己を取り巻く世界を語っていくプロセス、あるいは病いそのものの幻想を語り構築していくプロセスを可視化させた。そして、そのように幻想的に語ることは当事者の語り手たちにとってどのような意義があるのか、ということ、四つのテキストを分析することで考察して来た。

取り上げたテキストは、徳富蘆花「不如帰」以降、「第三の新人」に至るまでの大正から昭和期の四つの作品である。第一章と第二章では、(一)病理学的概念としての疾病を患った人物が、自らの身体や精神、あるいはそれを通して接する世界を幻想化して語る小説を取り上げた。第一章では、肺尖カタルを患った「私」が、自分が認識した世界を絵画的な美しさで語る梶井基次郎の「檸檬」を取り上げた。「檸檬」の分析では、物語の根幹をなす「えたいの知れない不吉な塊」という幻想が実は病いが幻想化されたものであることを指摘し、「私」が自覚的な「錯覚」・「想像」を遂行することでこの「えたいの知れない不吉な塊」を爆破し、「自分にこそふさわしい生」を回復しようする姿を見出した。第二章では、病いを患った語り手が、病いによって自らの身体や精神あるいはそれを通して接する世界を幻想化する堀辰雄の「死の素描」を取り上げた。「死の素描」の語り手「僕」は、作品発表当時死に至る恐れのある病いであった急性肺炎を患っていた。「僕」は病いを患った自分自身が置かれた状況を幻想的に語ることで、病いへの悲惨なイメージを巧みに転倒させ緩和し、ひいては「僕」が病いを受け入れ向き合っていくことにも繋がっている。第三章と第四章では、(二)自分が患った病いそのものに対するイメージを幻想化して語る小説を取り上げた。第三章の伊藤整「病歴」では、「私」は幻想の病いと幻想の健康という本来実体のない二分法的構図を語りによって構築し、その中でどちらにも自分を属させることができず何度も境界を引く自己の姿を、自らの病歴として語っていた。「私」が病歴を語ることは、病いが差別的に捉えられる一方で健康が極度に規律化された同時代状況の中で、本来二項対立的なものでない病いと健康を二項対立的に捉えた結果、自己を無化するより他ない人間の姿を暴き出していた。第四章の吉行淳之介「決闘」では、病理学的概念としての疾病の症状に「診断」という言葉が与えられることによって、その病名が孕む意味をも取り込んだ「病い」が

実体化していくプロセスが、言葉とその意味のずれによって嘔喘息発症へと自分自身を追い込んでいく「私」の語りによって示唆されていた。

さて、ソングや柄谷をはじめとした先行研究の多くでは、本研究が言うところの病いの幻想は、疾病の苦しみを持つ患者たちに、疾病の実態とは異なる別の意味までもを押し付け、二重の苦しみを強いるものとして批判的に捉えられてきたことは、序章において既に述べた通りである。しかしながら、このように病いを患った一人称の語り手が語る作品に焦点を当て、彼らの語り¹に耳を傾けてみたとき、必ずしも先行研究におけるこういった指摘が正しいとは言えないことは明らかであろう。

まず、病いを患ったこと²によって自己や自己の置かれた状況を幻想的に語る、「檸檬」では、「錯覚」・「想像」という幻想を自発的に用いることで、「えたいの知れない不吉な塊」つまり病いを「大爆発」させることができた。「死の素描」の語り手「僕」は、病いを幻想的に語ることを、病いや死を受け入れたり、あるいはそれに立ち向かっていくための力としていた。彼は、幻想的な語りを遂行する中で、主体的に病いの意味転倒を操り、その苦痛を緩和させて柔軟に受け入れたり、さらに現状を克服するための原動力としていたのである。このことは、現実社会における緩和ケアやホスピスの問題に通じるところがある。例えばホスピスにおいて、死後の世界の想像を基調とする宗教が、重要な役割を担っていることは、その証左といえよう。

また、山口昌男が、次のような指摘を行っていることに注目してみよう。

筆者がこの雑文で注意を喚起したのは、病気もまた文化記号論の重要な部分を構成するという点である。(略)筆者の憂えるのは、病気に対するイメージの一元化と、そのイメージの弱体化に伴う病気を介した想像力の弱体化である。病気は、かつては貧困とともに世界のより広大な宇宙的拮据³を発見するきっかけ、あるいは徴表であったのだ。⁶²

さらに山口は、病いを通して負の祝祭空間が現れる、つまり「病いの状態において、人は日常生活の演技の場から離されて、究極的には死のイメージを射程に入れながら、自らの身体と欠乏の状態においてつき合いなおす」のだと述べたうえで、次のようにも述べている。

正の祝祭性が人を密度の高い集合性に導くとしたら、病いに現れる負の祝祭性は、人を個の世界に連れ戻す。病いは他人に伝達不可能なものであり、同じ苦痛を他人と共有することはできない。とすると、人は、全く日常生活の中で繋がりが断たれていた、隠れた「私」とつきあわざるをえなくなる。⁶³

山口は、一元化された病いの捉え方に対して異なる見方を提示している。すなわち彼は、病いを患うということに対して単純に負のイメージで捉えるのではなく、「宇宙的拡がりを見出すきっかけ」など、積極的な意味を見出しているのだ。病いを患うことは、そもそも一元的に極端な負のイメージとして捉えられるべきものではないのである。

次に、「病歴」や「決闘」の「私」や「僕」は、自らの患う病い自体を幻想的に語っていた。彼らが語る病いの経験は、不思議で奇妙な印象を読者に抱かせる側面はあるが、それは決して、単なるテキストの中の面白おかしい仕掛けなのではない。彼らは幻想の病いを語ることで、その現実とは異なる「意味」を蔓延させるのではなく、むしろそのような幻想の病いが構築されていくプロセスを暴き出しているのである。

この病いの言説構造に関連して、桂秀実が病いを患った中上健次のエピソードを語っていることに注目したい。桂は、中上が左脇腹の腫れと痛みを肝臓が悪いと自己診断していたが、実際に医者に診てもらおうと「ああ、これは肝臓でも脾臓でもない。腎臓です、すぐ切らなきゃいかん」と告げられたことに対して「助かった」と思った、という発言をしたことについて、次のように述べている。

中上の発言は、ひとが病を受容するレヴェルを「自在に往還」しているとも言いうるが、同時に、癌という隠喩を共有する共同体のコードを攪乱する吃音性によって、ユーモアを産み出しているとも評しうるからである。⁶⁴

ここで語られている中上のユーモアとは、「癌という隠喩を共有する共同体のコード」を攪乱したことによって生まれたものである。裏を返せば、彼は病いの幻想に対して自覚的であったのであり、だからこそこのユーモアは生じたのである。

「病歴」や「決闘」における語り手は、病いを幻想的に語る過程において、普段可視化されていない病いの幻想を暴き出しているのであり、社会の中で極めて見えにくくなっている病いの幻想を可視化して読者へ示してくれるのである。

以上見てきたように、病いを幻想的に語る一人称の語り手たちは、病いの幻想に翻弄される一元的な被害者などではない。彼らは病いの幻想を巧みに操り、それを語ることによって自らの原動力としている。また一方で、自らの患った幻想的な病いを語る語り手たちは、それを語ることによって、それに屈するのではなく、むしろそのような幻想の病いが構築されるプロセスを暴き出し、私たちの目に晒したのである。

繰り返すが、病いを幻想的に語る語り手たちは、決して一元的な被害者なのではない。むしろ、病いの幻想の負の側面が殊更に強調され、実体のない「病者」を思い描いてそれを被

害者の側へと追い込んでしまうならば、それこそ表象の暴力を行使しているのではないか。もし、病いを患った当事者が生み出す幻想をも「隠喩」や「意味」として措定し、「解放」すべき対象として捉えるなら、そのように「病者」を捉える彼らこそ、健康の幻想に翻弄されている可能性があるのだ。

今後の課題としては、病いの個別性の問題を明らかにしていくことが挙げられる。「病歴」のテキストにおいて、病いを患った人々が「病者」という記号として一括りに差別的イメージで語られる箇所があることを指摘した。しかしながら、患者は当然それぞれに、病いに関する固有の背景を持っている。このような患者の固有性についてより一層詳細に見ていくためには各々の語り手が患っている病いの個別の側面についてのさらに厳密な分析が必要である。

また、読者の問題についてもより詳細な分析が必要である。序章において、幻想とは読者の参与を前提としていることを述べた。つまり、病いの幻想的な語りは、語り手だけではなく読者もそこに参加させられることで補強されるという側面があるのだ。そしてこのことは、特に文化的概念としての「病い」が現実社会において生じるときに、実際に病いを患う当事者だけではなく、様々な言説やそれを内面化した他者の力が作用しているという構図と結びつく。よって、病いの幻想語りにおける語りの言語戦略だけでなく、読者の果たす役割についてもより詳細な分析が必要であるだろう。

そして、最後になるが、本研究により得られた成果は、国語科教育の現場において、教師と児童生徒が抽象度の高い文学的文章を解釈する技術を獲得する際の一つの道標ともなり得る。国語科教育の現場で、様々な背景をもつ児童・生徒が同じ文学作品を読む、という場面において、例えば、特異な立場にある一人称の語り手によって語られる物語世界は、その独特な語りの性質ゆえに、文学作品の読解が得意な子どもにとっては面白いものと捉えられても、読解が苦手な子どもにとっては難解で受け入れ難いものとして捉えられる可能性がある。本研究で抽象的な物語世界を具体化していくプロセスを可視化して示したことが、子どもらの躓きの実態を可視化することにつながり、この躓きの解消を図る際に、教師が具体的な手立てを見出すための手助けとなれば良い。

謝辞

本修士論文を執筆するにあたって、和田崇准教授から丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。先生のご指導が無ければ、本研究を完成させることは出来なかつたでしょう。厚く感謝を申し上げます。国文学ゼミナール（近現代）の皆様からは、多くのご指摘を頂きました。ここに感謝の意を表します。占領開拓期文化研究会の皆さまには、外部からの発表にも関わらず温かく迎えて頂き、大変意義深いご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。また、最後になりましたが、大学院で学びたいという私の希望を支えて下さった松本昭彦教授に、心より感謝申し上げます。

【註】

序章

- 1 Susan Sontag, *Illness as metaphor*, Farrar, Straus and Giroux, 1978. ただし、引用は、スーザン・ソントグ著、富山太佳夫訳『隠喩としての病い』（みすず書房、一九八二年）による。
- 2 柄谷行人「病という意味」（『季刊芸術』（季刊芸術出版、一九七九年七月））。ただし引用は、柄谷行人『日本近代文学の起源』（講談社、一九八〇年）による。
- 3 George M. Foster and Barbara G Anderson, *Medical Anthropology*, John Wiley & Sons, Inc, 1978. ただし引用は、G・M・フォスター、B・G・アンダーソン著、中川米造監訳『医療人類学』（リブレポート、一九八七年）による。なお、疾病と病いの分類に関しては、次のような訳注が付されている。「この *disease-illness* の二分法は、医療人類学や医療社会学や医療哲学の分野で、よく使われるものである。*disease* には、病理学的概念とか「客観的」概念とか、治療者（医学）側の概念とかがあてられ、*illness* には、文化的概念とか、「主観的」概念とか、患者（主体側）の概念とかがあてられることが多い。ここでは、現在一般的に使われている訳と思われる、*disease*—疾病、*illness*—病いを訳にあてておく」。
- 4 小林昌廣『病い論の現在形』（青弓社、一九九三年）参照。
- 5 奥野克巳、山崎剛「病気と文化」（池田光穂、奥野克巳編著『医療人類学のレッスン—病いをめぐる文化を探る』（学陽書房、二〇〇七年）より引用。なお、ここではまとめられているヤングによる指摘は、Young, Allan 1982 “The Anthropologies of Illness and Sickness.” In *Annual Review of Anthropology*. 11 pp.257-85 に拠っている。
- 6 同注1。
- 7 Tzvetan Todorov, *INTRODUCTION À LA LITTÉRATURE FANTASTIQUE*, Editions du Seuil, 1970. ただし引用は、ツヴェタン・トドロフ著、三好郁朗訳『幻想文学論序説』（東京創元社、一九九九年）による。
- 8 同注2。

第一章

- 9 須藤松雄「梶井基次郎」（日本近代文学会、小田切進編『日本近代文学大事典 第一巻』（講談社、一九七七年）参照。
- 10 鷺只夫『檸檬』（『国文学 解釈と鑑賞』（至文堂、一九九九年六月））。ただし引用は、鈴木貞美編『梶井基次郎『檸檬』作品論集 近代文学作品論集成12』（クレス出版、二〇〇二年）による。
- 11 福永武彦『檸檬』鑑賞」（『近代文学鑑賞講座18 中島敦・梶井基次郎』（角川書店、一九五九年）より引用。ただし引用は、鈴木貞美編『梶井基次郎『檸檬』作品論集 近代文学作品論集成12』（クレス出版、二〇〇二年）による。

- 12 三好行雄「青春の虚像―「檸檬」梶井基次郎」(『国文学 解釈と鑑賞』(至文堂、一九六三年一月) 初出、『作品論の試み』(至文堂、一九六七年)。ただし引用は、鈴木貞美編『梶井基次郎『檸檬』作品論集 近代文学作品論集成12』(クレス出版、二〇〇二年) による。
- 13 磯貝英雄「『檸檬』」(『国語教材研究講座 高等学校現代国語』(有精堂、一九六七年九月) 初出、『昭和初期の作家と作品』(明治書院、一九八〇年六月)。ただし引用は、鈴木貞美編『梶井基次郎『檸檬』作品論集 近代文学作品論集成12』(クレス出版、二〇〇二年) による。
- 14 内田照子「『檸檬』」(『評伝評論 梶井基次郎』(牧野出版、一九九三年)。ただし引用は、鈴木貞美編『梶井基次郎『檸檬』作品論集 近代文学作品論集成12』(クレス出版、二〇〇二年) による。
- 15 日比嘉高「身体・空間・心・言葉―梶井基次郎『檸檬』をめぐる―」(『佛教大学総合研究紀要』(二〇〇八年十二月) より引用)。
- 16 柏倉康夫『評伝 梶井基次郎 視ること、それはもうなにかなのだ』(左右社、二〇一〇年) より引用。
- 17 佐藤昌大「(私) 小説論―『檸檬』の前史をめぐる―」(『文芸研究』第十号(近畿大学大学院文芸学研究所、二〇一三年三月) より引用)。
- 18 大塚常樹「梶井基次郎・『檸檬』の言語戦略―「えたいの知れた吉な塊」が「えたいの知れない不吉な塊」を破壊する話―」(『国語と国文学』(至文堂、二〇一六年) より引用)。
- 19 磯貝英雄「『檸檬』」(『国語教材研究講座 高等学校現代国語』(有精堂、一九六七年九月) 初出、『昭和初期の作家と作品』(明治書院、一九八〇年六月)。ただし引用は、鈴木貞美編『梶井基次郎『檸檬』作品論集 近代文学作品論集成12』(クレス出版、二〇〇二年) による。
- 20 村山麗「梶井基次郎『檸檬』論…『病』を生きる「私」」(『上智大学国文論集』五一号(上智大学国文学会、二〇一七年) 参照)。
- 21 蓮實重彦『表層批評宣言』(筑摩書店、一九八五年) 参照。
- 22 同注4。

第二章

- 23 池内輝雄「堀辰雄の人と作品」(池内輝雄・編『鑑賞 日本現代文学 第一八巻 堀辰雄』(角川書店、一九八一年) 参照)。
- 24 佐々木基一「モダニズム文学」(日本近代文学館、小田切進編『日本近代文学大事典』第四巻(講談社、一九七七年) 参照)。
- 25 谷田昌平編「年譜」(中村眞一郎、福永武彦、郡司勝義編『堀辰雄全集』別巻二(筑摩書房、一九八〇年))
- 26 紅野敏郎、紅野謙介、千葉俊二、宗像和重、山田俊治編『日本近代短篇小説選 昭和篇1』(岩波書店、二〇一二年) より引用)。
- 27 池内輝雄「本文および作品鑑賞」(池内輝雄・編『鑑賞 日本現代文学 第一八巻 堀辰雄』(角川書店、一九八一年) に収録された「詩」の「天使」という語に付けられた注釈を参照)。
- 28 日高昭二「堀辰雄とモダニズム―天使の詩学―」(『国文学 解釈と鑑賞』第六一卷九号

(至文堂、一九九六年九月)より引用。

²⁹ グルジンダー・サツグ「錯覚・鏡・天使とその技法―初期堀辰雄論」(『法政大学大学院紀要』第六二号(法政大学大学院、二〇〇九年))より引用。

³⁰ 渡部麻実「科学で芸術をする『死の素描』―堀辰雄の初期小説におけるコクトーとポアンカレ―」(『國語と國文学』第八七号第五号(ぎょうせい、二〇一〇年五月))より引用。

³¹ 一般財団法人日本エレベーター協会HPを参照。

(<http://www.n-elekyo.or.jp/encyclopedia/history/levator.html?tab=1> 二〇一八年三月六日最終アクセス)

³² 「国民衛生の動向」(『厚生の指標』二九卷九号、一九八二年)より転載。

³³ 宮坂康一「初期堀辰雄作品における「死」の導入―コクトオ受容にみる作品及び作家の変容―」(『国文学研究』一六八卷(早稲田大学国文学会、二〇一二年一〇月))より引用。

第三章

³⁴ 曾根博義作成、瀬沼茂樹校閲「伊藤整年譜」(『伊藤整全集』第二十四卷(新潮社、一九七四年))参照。

³⁵ 亀井秀雄「第2巻解説―自我構造の再発見―」(『伊藤整全集―2― 付録』(新潮社、一九七三年))より引用。

³⁶ 鎌原正巳「文藝時評」(『早稲田文学』(一九四三年三月))より引用。

³⁷ 森山啓「文藝時評 若々しさの必要」(『新潮』(一九四三年三月))より引用。

³⁸ 徳田戯二「文藝時評 文学も決戦で征くべし」(『文藝首都』(一九四三年二月))より引用。

³⁹ Frank González-Crussi, *A Short History of Medicine*, Random House, 2007.ただし引用は、フランク・ゴンザレス・クルッシ著、堤理華訳『医学が歩んだ道』(ランダムハウス講談社、二〇〇八年)による。

⁴⁰ Sander L. Gilman, *DESEASE AND REPRESENTATION Images of Illness from Madness to AIDS*, Cornell University Press, 1988.ただし引用は、サンダー・L・ギルマン著、本橋哲也訳「病氣と表象―狂気からエイズにいたる病のイメージ」(ありな書房、一九九七年)による。

⁴¹ 野村一夫「第二章 健康クリーシェ論―折込広告における健康言説の諸類型と培養型ナヴィゲート構造の構築」(佐藤純一、池田光穂、野村一夫、寺岡伸悟、佐藤哲彦編『ソキウス研究叢書』健康論の誘惑』(文化書房博文社、二〇〇〇年))より引用。

⁴² 川上武『現代日本医療誌』(勁草書房、一九六五年)より引用。

⁴³ 美馬達哉「軍国主義時代―福祉国家の起源」(『医療神話の社会学』(世界思想社、一九九八年))より引用。

⁴⁴ 同注43。

⁴⁵ 杉山章子「戦時体制下の医療」(新村拓編『日本医療誌』(吉川弘文館、二〇〇六年))より引用。

⁴⁶ 富永茂樹『健康論序説』(河出書房新社、一九七七年)より引用。

⁴⁷ 同注4。

第四章

- 48 片桐葉子「吉行淳之介」(浅井清、佐藤勝、篠弘、鳥居邦朗、松井利彦、武川忠一、吉田瀨生編『新研究資料現代日本文学 第二卷 小説Ⅱ』(明治書院二〇〇〇年)より引用。
- 49 『吉行淳之介全集8』(講談社、一九七二年)に収録された著者作成の「年譜」参照。
- 50 吉行淳之介「上野毛散策④」、『吉行淳之介自選作品』枝折り』、『吉行淳之介自選作品』枝折り』(潮出版社、一九七五年)より引用。
- 51 清岡卓行「吉行淳之介の出發」、『吉行淳之介全集1』(講談社、一九七一年)より引用。
- 52 小嶋洋輔「吉行淳之介『男と女の子』―「戦後」への適応」、『千葉大学人文社会科学研究所』一三三号(千葉大学大学院人文社会科学研究所、二〇一一年)より引用。
- 53 平岡篤頼「敵としての健康者」、『吉行淳之介全集』第二卷解説(講談社、一九八三年)。
- ただし引用は、平岡篤頼『記号の囊』(早稲田文学会・発行、太田出版・発売、二〇〇八年)による。
- 54 同注7。
- 55 成田孝昭「四季」、『日本近代文学大事典 第五卷』(講談社、一九七七年)参照。
- 56 山口昌男「病いの宇宙誌」、『中央公論』(一九七六年九月)。
- ただし引用は、山口昌男『病いの宇宙誌』(人間と歴史社、一九九〇年)による。
- 57 立川昭二「病いの記号論―がん・エイズをめぐる」、『世界』一二月号(岩波書店、一九八七年二月)、原題「エイズをどう読みとるか―病いの記号論へ」
- ただし引用は、立川昭二『見える死、見えない死』(筑摩書房、一九八八年)による。
- 58 吉行淳之介「治療」の分析には、『吉行淳之介全集 第一卷』(新潮社、一九九七年)に収録されたテキストを使用した。
- 59 「治療」の同時代評には本論で引用した十返、佐々木のもの以外にも、城恵爾「文芸時評 期待外れの新人群」、『北国新聞』一九五三年一月二六日)、富樫左門「文芸時評」、『三田文学』一九五四年三月)が見られるが、いずれも「治療」について批判的に評価している。
- 60 十返肇「文芸時評 期待外れの評論家小説」、『中部日本新聞』(一九五三年一月二五日)より引用。
- 61 佐々木基一「文芸時評 多すぎる持味だけの作品」、『日本読書新聞』(一九五四年一月一日)より引用。
- 62 同注5・6。
- 63 同注5・6。
- 64 桂秀実「文芸時評 美学化の病・病の美学化」、『すばる』六月号(集英社、一九九二年六月)より引用。

終章